

Gura ライブラリリファレンス

Updated: February 21, 2013

copyright © 2011- Yutaka Saito (ypsitau@nifty.com)

Official site: <http://www.gura-lang.org/>

目次

1. このリファレンスについて	11
2. 組み込み関数	12
2.1. テキスト表示	12
2.2. 制御構文	13
2.2.1. 関数内のフロー制御	13
2.2.2. 繰り返し	13
2.2.3. 繰り返し中のフロー制御	14
2.2.4. 条件分岐	14
2.2.5. 例外処理	14
2.2.6. switch 文	15
2.3. データ変換	15
2.4. クラス操作	16
2.5. 変数スコープ操作	16
2.6. イテレータ生成	17
2.7. フォーマット変換	18
2.8. モジュール	18
2.9. データ型チェック	18
2.10. 演算・統計	19
2.11. スクリプト評価	19
2.12. 乱数	19
2.13. その他	20
3. 定義済み変数	21
4. 組み込みクラス	22
4.1. object クラス	22
4.1.1. 概要	22
4.1.2. インスタンスの生成	22
4.2. binary クラス	22
4.2.1. 概要	22
4.2.2. インスタンスの生成	22
4.2.3. クラスメソッド	22
4.2.4. インスタンスメソッド	23
4.3. codec クラス	25
4.3.1. 概要	25
4.3.2. インスタンスの生成	25
4.3.3. クラスメソッド	25
4.3.4. インスタンスメソッド	25

4.4.	color クラス.....	26
4.4.1.	概要.....	26
4.4.2.	インスタンスの生成.....	26
4.4.3.	Web 標準カラー名.....	26
4.4.4.	クラスプロパティ.....	26
4.4.5.	インスタンスプロパティ.....	26
4.4.6.	インスタンスメソッド.....	27
4.5.	dict クラス.....	27
4.5.1.	インスタンスの生成.....	27
4.5.2.	インスタンスメソッド.....	28
4.6.	environment クラス.....	29
4.6.1.	インスタンスの生成.....	29
4.6.2.	インスタンスメソッド.....	29
4.7.	error クラス.....	30
4.7.1.	インスタンスの生成.....	30
4.7.2.	インスタンスメソッド.....	30
4.8.	expr クラス.....	30
4.8.1.	インスタンスの生成.....	30
4.8.2.	Expr 要素と判定メソッド.....	30
4.8.3.	要素を参照するインスタンスメソッド.....	31
4.8.4.	その他のインスタンスメソッド.....	31
4.8.5.	式を構成する要素.....	32
4.9.	function クラス.....	33
4.9.1.	インスタンスの生成.....	33
4.9.2.	インスタンスプロパティ.....	34
4.9.3.	インスタンスメソッド.....	34
4.10.	image クラス.....	35
4.10.1.	インスタンスの生成.....	35
4.11.	インスタンスメソッド.....	35
4.12.	iterator クラス.....	37
4.12.1.	インスタンスの生成.....	37
4.12.2.	インスタンスメソッド.....	38
4.13.	list クラス.....	38
4.13.1.	インスタンスの生成.....	38
4.13.2.	インスタンスメソッド.....	39
4.14.	matrix クラス.....	45
4.14.1.	インスタンスの生成.....	45
4.14.2.	インデクスによる要素操作.....	46
4.14.3.	インスタンスメソッド.....	46

4.15.	palette クラス	47
4.15.1.	インスタンスの生成	47
4.15.2.	インスタンスメソッド	47
4.16.	semaphore クラス	48
4.16.1.	インスタンスの生成	48
4.16.2.	インスタンスメソッド	48
4.17.	stream クラス	48
4.17.1.	インスタンスの生成	48
4.17.2.	ストリーム操作を行うグローバル関数	49
4.17.3.	インスタンスメソッド	49
4.17.4.	インスタンスプロパティ	51
4.18.	string クラス	51
4.18.1.	インスタンスの生成	51
4.18.2.	インスタンスメソッド	52
5.	sys モジュール	55
5.1.	概要	55
5.2.	モジュール関数	55
5.3.	モジュール変数	55
6.	fs モジュール	56
6.1.	概要	56
6.2.	ストリームのオープン	56
6.3.	パスのサーチ	56
6.4.	モジュール関数	56
6.5.	fs.stat クラス	57
6.5.1.	インスタンスプロパティ	57
7.	os モジュール	59
7.1.	概要	59
7.2.	モジュール変数	59
7.3.	モジュール関数	59
8.	path モジュール	61
8.1.	概要	61
8.2.	モジュール関数	61
9.	math モジュール	64
9.1.	概要	64
9.2.	モジュール関数	64
10.	time モジュール	67
10.1.	概要	67
10.2.	モジュール関数	67
10.3.	モジュール変数	67

10.4.	datetime クラス	67
10.4.1.	概要	67
10.4.2.	インスタンスの生成	67
10.4.3.	インスタンスメソッド	68
10.4.4.	インスタンスプロパティ	69
10.5.	timedelta クラス	69
10.5.1.	概要	69
10.5.2.	インスタンスの生成	69
10.5.3.	インスタンスプロパティ	69
11.	hash モジュール	70
11.1.	概要	70
11.2.	モジュール関数	70
12.	net.http モジュール	71
12.1.	概要	71
12.2.	パス名の拡張	71
12.3.	モジュール変数	71
12.4.	モジュール関数	71
12.5.	net.http.server クラス	72
12.5.1.	インスタンスの生成	72
12.5.2.	インスタンスプロパティ	72
12.5.3.	インスタンスメソッド	72
12.5.4.	サンプルプログラム	72
12.6.	net.http.client クラス	72
12.6.1.	インスタンスの生成	72
12.6.2.	インスタンスメソッド	73
12.6.3.	リクエスト発行インスタンスメソッド	73
12.6.4.	サンプルプログラム	74
12.7.	net.http.stat クラス	74
12.7.1.	概要	74
12.7.2.	メッセージヘッダのフィールド定義	74
12.7.3.	インスタンスプロパティ	74
12.7.4.	インスタンスメソッド	74
12.8.	net.http.request クラス	74
12.8.1.	概要	74
12.8.2.	メッセージヘッダのフィールド定義	75
12.8.3.	インスタンスプロパティ	75
12.8.4.	インスタンスメソッド	75
12.9.	net.http.session クラス	76
12.9.1.	概要	76

12.9.2.	インスタンスプロパティ	76
12.10.	net.http.response クラス	77
12.10.1.	概要	77
12.10.2.	メッセージヘッダのフィールド定義	77
12.10.3.	インスタンスプロパティ	77
12.10.4.	インスタンスメソッド	77
13.	bmp モジュール	79
13.1.	概要	79
13.2.	ストリーム処理	79
13.3.	image クラスの拡張	79
13.3.1.	インスタンスメソッド	79
14.	gif モジュール	80
14.1.	概要	80
14.2.	ストリームの読み書き	80
14.3.	gif.content クラス	80
14.3.1.	概要	80
14.3.2.	GIF Data Stream の構造	80
14.3.3.	制限事項	81
14.3.4.	インスタンスの生成	81
14.3.5.	インスタンスメソッド	81
14.3.6.	インスタンスプロパティ	82
14.3.7.	インスタンスプロパティの詳細	82
14.4.	image クラスの拡張	84
14.4.1.	インスタンスメソッド	84
14.4.2.	インスタンスプロパティ	84
14.4.3.	インスタンスプロパティの詳細	84
14.4.4.	パレットの扱い	85
15.	jpeg モジュール	87
15.1.	概要	87
15.2.	ストリームの読み書き	87
15.3.	image クラスの拡張	87
15.3.1.	インスタンスメソッド	87
16.	msico モジュール	88
16.1.	概要	88
16.2.	ストリームの読み書き	88
16.3.	msico.content クラス	88
16.3.1.	概要	88
16.3.2.	インスタンスの生成	88
16.3.3.	インスタンスメソッド	88

16.4.	image クラスの拡張	89
16.4.1.	インスタンスメソッド	89
17.	png モジュール	90
17.1.	概要	90
17.2.	ストリームの読み書き	90
17.3.	image クラスの拡張	90
17.3.1.	インスタンスメソッド	90
18.	ppm モジュール	91
18.1.	概要	91
18.2.	ストリームの読み書き	91
18.3.	image クラスの拡張	91
18.3.1.	インスタンスメソッド	91
19.	xpm モジュール	92
19.1.	概要	92
19.2.	ストリームの書きこみ	92
19.3.	image クラスの拡張	92
19.3.1.	インスタンスメソッド	92
20.	freetype モジュール	93
20.1.	概要	93
20.2.	関数	93
20.3.	freetype.face クラス	93
20.3.1.	インスタンスメソッド	93
20.3.2.	インスタンスプロパティ	94
20.4.	image クラスの拡張	95
20.4.1.	インスタンスメソッド	95
21.	sqlite3 モジュール	96
21.1.	概要	96
21.2.	データオブジェクトの対応	96
21.3.	sqlite3.db クラス	96
21.3.1.	インスタンスの生成	96
21.3.2.	インスタンスメソッド	96
22.	gzip モジュール	97
22.1.	概要	97
22.2.	モジュール変数	97
22.3.	モジュール関数	97
22.4.	stream クラスの拡張	97
22.4.1.	インスタンスメソッド	97
23.	bzip2 モジュール	98
23.1.	概要	98

23.2.	モジュール関数.....	98
23.3.	stream クラスの拡張.....	98
23.3.1.	インスタンスメソッド.....	98
24.	zip モジュール.....	99
24.1.	概要.....	99
24.2.	パス名の拡張.....	99
24.3.	zip.reader クラス.....	99
24.3.1.	インスタンスの生成.....	99
24.3.2.	インスタンスメソッド.....	99
24.4.	zip.writer クラス.....	99
24.4.1.	インスタンスの生成.....	99
24.4.2.	インスタンスメソッド.....	100
24.5.	zip.stat クラス.....	100
24.5.1.	インスタンスプロパティ.....	100
25.	tar モジュール.....	101
25.1.	概要.....	101
25.2.	パス名の拡張.....	101
25.3.	モジュール変数.....	101
25.4.	tar.reader クラス.....	102
25.4.1.	インスタンスの生成.....	102
25.4.2.	インスタンスメソッド.....	102
25.5.	tar.writer クラス.....	102
25.5.1.	インスタンスの生成.....	102
25.5.2.	インスタンスメソッド.....	103
25.6.	tar.stat クラス.....	103
25.6.1.	インスタンスプロパティ.....	103
26.	re モジュール.....	104
26.1.	概要.....	104
26.2.	正規表現パターン記述について.....	104
26.3.	モジュール関数.....	104
26.4.	re.match クラス.....	105
26.4.1.	インスタンスの生成.....	105
26.4.2.	マッチパターンの取得.....	105
26.4.3.	インスタンスメソッド.....	106
26.5.	re.pattern クラス.....	106
26.5.1.	インスタンスの生成.....	106
26.5.2.	インスタンスメソッド.....	106
26.6.	string クラスの拡張.....	107
26.6.1.	インスタンスメソッド.....	107

27.	csv モジュール.....	108
27.1.	概要.....	108
27.2.	モジュール関数.....	108
27.3.	csv.writer クラス.....	108
27.3.1.	インスタンスプロパティ.....	108
27.3.2.	インスタンスメソッド.....	108
27.4.	stream クラスの拡張.....	108
27.4.1.	インスタンスメソッド.....	108
28.	xml モジュール.....	109
28.1.	概要.....	109
28.2.	モジュール関数.....	109
28.3.	xml.parser クラス.....	109
28.3.1.	インスタンスの生成.....	109
28.3.2.	オーバーライドメソッド.....	109
28.3.3.	インスタンスプロパティ.....	110
28.3.4.	インスタンスメソッド.....	110
28.4.	xml.element クラス.....	110
28.4.1.	インスタンスの生成.....	110
28.5.	stream クラスの拡張.....	111
28.5.1.	インスタンスメソッド.....	111
29.	yaml モジュール.....	112
29.1.	概要.....	112
29.2.	データオブジェクトの対応.....	112
29.3.	モジュール関数.....	112
29.4.	stream クラスの拡張.....	112
29.4.1.	インスタンスメソッド.....	112
30.	uuid モジュール.....	113
30.1.	概要.....	113
30.2.	モジュール関数.....	113
31.	mswin モジュール.....	114
31.1.	概要.....	114
31.2.	mswin.ole クラス.....	114
31.2.1.	インスタンスの生成.....	114
31.3.	mswin.regkey クラス.....	114
31.3.1.	概要.....	114
31.3.2.	定義済みインスタンス.....	114
31.3.3.	インスタンスメソッド.....	114
31.4.	COM について.....	116
31.4.1.	COM サーバへの接続.....	116

31.4.2.	プロパティの取得	116
31.4.3.	プロパティの設定	117
31.4.4.	メソッドの実行	117
31.4.5.	イテレータの生成	117
32.	lets_module モジュール	118
32.1.	概要	118
33.	modbuild モジュール	119
33.1.	概要	119
33.2.	modbuild.Builder クラス	119
33.3.	インスタンスプロパティ	119
33.4.	インスタンスメソッド	119
34.	gurbuild モジュール	120
34.1.	概要	120
34.2.	モジュール関数	120

1. このリファレンスについて

本リファレンスは **Gura** の本体や標準添付のモジュールで定義されている関数やクラスの仕様について説明します。**Gura** 言語そのものの仕様などについては「**Gura 言語マニュアル**」を参照してください。

また、仕様の大きなモジュールについては、以下のように独立したリファレンスが用意されています。

- Gura モジュールリファレンス - cairo
- Gura モジュールリファレンス - opengl
- Gura モジュールリファレンス - sdl
- Gura モジュールリファレンス - tk
- Gura モジュールリファレンス - wx

2. 組込み関数

2.1. テキスト表示

```
print(value*):map:void
```

引数 `value` の値を文字列に変換した結果を連結して標準出力に出力します。

```
println(value*):map:void
```

引数 `value` の値を文字列に変換した結果を連結して標準出力に出力し、最後に改行します。

```
printf(format:string, values*):map:void
```

文字列 `format` 中のフォーマット指定に基づいてリストの内容を文字列に変換します。書式の形式は `%[flags][width][.precision]specifier` のようになります。

`[specifier]` には以下のうちのひとつを指定します。

specifier	説明
d, i	10 進符号つき整数
u	10 進符号なし整数
b	2 進数整数値
o	8 進符号なし整数
x, X	16 進符号なし整数
e, E	指数形式浮動小数点数 (E は大文字で出力)
f, F	小数形式浮動小数点数 (F は大文字で出力)
g, G	eまたはf形式の適した方 (G は大文字で出力)
s	文字列
c	文字

`[flags]` には以下のうちのひとつを指定します。

flags	説明
+	プラス数値のとき、先頭に + 記号をつけます
-	左詰めで文字列を配置します
(空白)	プラス数値のとき、先頭に空白文字をつけます
#	2 進、8 進、16 進整数の変換結果に対しそれぞれ "0b", "0", "0x" を先頭につけます
0	桁数の満たない部分を 0 で埋めます

`[width]` には最小の文字幅を 10 進数値で指定します。文字列に変換した結果の長さがこの数値に満たないとき、残りの幅を空白文字（文字コード 32）で埋めます。長さがこの数値以上の場合は何もしません。`[width]` の位置に数値ではなくアスタリスク "*" を指定すると、最小の文字幅を指定する数値を引数から取得します。

`[precision]` は `specifier` によって意味が異なります。浮動小数点数に対しては、小数点以下の表示桁数の指定になります。

2.2. 制御構文

2.2.1. 関数内のフロー制御

```
return (value?):symbol_func
```

関数の処理を中断し、呼び出し元のフローに戻ります。引数として `value` を渡すと、中断した関数の評価値をその値に設定します。省略すると、評価値は `nil` になります。

この関数は、アトリビュート `:symbol_func` が指定されています。つまり、引数が必要ない場合は引数リストの括弧を省略して呼び出すことができます。

2.2.2. 繰り返し

```
repeat (n?:number) {block}
```

引数で指定した回数だけ `block` の処理を繰り返します。引数は省略可能で、省略した場合無限ループになります。

```
while (`cond) {block}
```

引数で指定した式が条件を満たす間だけ `block` の処理を繰り返します。

```
for (`expr+) {block}
```

一つ以上のイテレータ代入式を引数にとり、イテレータが終了するまで `block` の処理を繰り返します。イテレータ代入式の形式は以下になります。

```
symbol in iterator
```

```
[symbol1, symgol2 ..] in iterator
```

最初の形式では、イテレータの要素が `symbol` で表される変数に代入されます。もし要素がリストであれば、`symbol` に代入される値はそのリストそのものになります。二番目の形式では、イテレータの要素がリストであればリストの要素ごとに対応する位置にあるシンボルの変数に値を代入します。要素がリストでない場合、全てのシンボルの変数に同じ値が代入されます。

イテレータ代入式が二つ以上指定された場合、一回のループで引数中のイテレータを一つずつ評価していきます。こうして、いずれかのイテレータが終了するまで処理が繰り返されます。つまり、イテレータの要素数が異なるときは、ループの回数は一番短いイテレータの要素数にあわせられます。

```
cross (`expr+) {block}
```

一つ以上のイテレータ代入式を引数にとり、イテレータが終了するまで `block` の処理を繰り返します。イテレータ代入式が一つするとき、処理内容は `for` 関数に一つの引数を渡したときと同じです。二つのイテレータ代入式を指定すると多重ループになり、一つ目のイテレータが外側、二つ目のイテレータが内側のループを構成します。イテレータ代入式を複数指定することも可能で、`n` 個の代入式を指定すると `n` 重の多重ループになります。

スクリプト	実行結果
<pre>cross (x in 0..1, y in 0..2) { printf('[%d,%d]', x, y) }</pre>	<pre>[0,0] [0,1] [0,2] [1,0] [1,1] [1,2]</pre>

2.2.3. 繰り返し中のフロー制御

`break(value?):symbol_func`

繰り返し関数の処理を中断します。引数として `value` を渡すと、中断した繰り返し関数の戻り値をその値に設定します。省略すると、繰り返し関数の戻り値は `nil` になります。

この関数は、アトリビュート `:symbol_func` が指定されています。つまり、引数が必要ない場合は引数リストの括弧を省略して呼び出すことができます。

`continue(value?):symbol_func`

繰り返し処理の続きをスキップして先頭に戻ります。引数として `value` を渡すと、ループのその回の評価値をその値に設定します。省略すると、その回の評価値は `nil` になります。

この関数は、アトリビュート `:symbol_func` が指定されています。つまり、引数が必要ない場合は引数リストの括弧を省略して呼び出すことができます。

2.2.4. 条件分岐

`if (`cond) {block}`

条件 `cond` が `true` のとき、`block` の内容を実行します。`false` のとき、このあとに `elsif` または `else` 関数が連結されていると、それらを実行します。

`elsif (`cond) {block}`

`if` または `elsif` 関数の後に連結して使用します。条件 `cond` が `true` のとき、`block` の内容を実行します。`false` のとき、このあとに `elsif` または `else` 関数が連結されていると、それらを実行します。

`else() {block}`

`if` または `elsif` 関数の後に連結して使用します。無条件で `block` の内容を実行します。

条件分岐のスクリプト例を以下に示します。

スクリプト
<pre>if (x == 0) { println('x value is zero') } elsif (x == 1) { println('x value is one') } else { println('other case') }</pre>

2.2.5. 例外処理

`try() {block}`

`block` を実行し、その間に例外が発生すると、後に連結された `except` 関数を実行します。

`except(errors*:error) {block}`

`try` または `except` 関数の後に連結して使用します。

発生した例外が引数 `errors` のいずれかに合致する場合 `block` を実行し、ブロックパラメータを `|error:error|` という形式で渡します。`error` は検出したエラーに対応する `error` 型のインスタンス

です。

例外が引数に合致しない場合、後に連結された `except` 関数を実行します。引数 `errors` を指定しないと、すべての例外に合致します。

```
raise(error:error, msg:string => 'error', value?)
```

例外を発生します。引数 `error` にエラーインスタンス、`msg` にエラーメッセージを指定します。引数 `value` にはエラーの追加情報を指定します。

例外処理のスクリプト例を以下に示します。

スクリプト
<pre>try { // some jobs } except(ValidationError) { e println('ValidationError captured: ', e.text) } except(IOException) { e println('IOException captured: ', e.text) } except { e println('other error captured: ', e.text) }</pre>

2.2.6. switch 文

```
switch() {block}
```

`switch` 文を構成します。`block` 中は `case` または `default` 関数の呼び出しを記述します。

```
case(`cond) {block}
```

条件 `cond` が `true` のとき、`block` の内容を実行し、`switch` 関数を抜けます。`false` のとき、`switch` の次に記述されている `case` や `default` 関数の呼び出しに移ります。

```
default() {block}
```

無条件に `block` の内容を実行し、`switch` 関数を抜けます。

2.3. データ変換

```
chr(num:number):map
```

UTF-8 文字コードを文字列に変換します。

```
ord(str:string):map
```

文字列の先頭の文字に対応する UTF-8 文字コードを返します。

```
int(value):map
```

数値を整数に変換した結果を返します。`value` が文字列のとき、これを数値に変換した結果を整数にして返します。

```
tonumber(value):map:[nil,zero,raise,strict]
```

文字列を `number` 型に変換した結果を返します。デフォルトでは、文字列の初めの部分が数値とみなせれば変換が成功します。アトリビュート `:strict` をつけると、文字列中に数値以外の文字が含まれてい

たとき変換に失敗するようになります。

変換に失敗したときのふるまいを以下のアトリビュートで指定することができます。

- `:nil` `nil` 値を返します (デフォルト)。
- `:zero` 数値 0 を返します。
- `:raise` `ValueError` 例外を発生します。

`tostring(value):map`

任意の値を文字列に変換した結果を返します。

`tosymbol(str:string):map`

文字列をシンボルに変換した結果を返します。

`hex(num:number, digits?:number):map:[upper]`

数値を 16 進文字列に変換した結果を返します。`digits` に最少の桁数を指定します。変換した結果の桁が `digits` にみえない場合、先頭を 0 で埋めます。アルファベットは小文字になりますが、アトリビュート:`upper` を指定すると大文字になります。

2.4. クラス操作

`class(superclass?:function) {block?}`

クラスを生成します。詳細は「[Gura 言語マニュアル](#)」を参照ください。

`struct(`args+):[loose] {block?}`

構造体のコンストラクタ関数を生成します。詳細は「[Gura 言語マニュアル](#)」を参照ください。

`classref(type:expr):map {block?}`

指定の型のクラスへの参照を返します。

`super(obj):map {block?}`

スーパークラスのメソッドや変数を参照するオブジェクトを返します。

2.5. 変数スコープ操作

`extern(`syms+)`

関数の内部で使います。指定したシンボルを、関数の外部で宣言されている変数に対する参照に設定します。指定のシンボルが外部スコープで見つからない場合、エラーになります。

`local(`syms+)`

関数以外のブロックの内部で使います。引数に指定したシンボルを、ブロックの内部のスコープに対する参照に設定します。

`scope(target?) {block}`

ローカルスコープを作成して `block` の内容を評価し、`block` で最後に評価された値を戻り値として返します。引数 `target` にモジュールまたは `environment` インスタンスを指定すると、それらのスコープ内で `block` の内容を評価します。

`locals (module?:module)`

現在のスコープにアクセスする `environment` 型データを返します。引数 `module` を指定すると、そのモジュールにアクセスする `environment` 型データを返します。

`outers ()`

現在のスコープのひとつ外のスコープにアクセスする `environment` 型データを返します。

`undef(`value+):[raise]`

引数 `value` で指定されているシンボルを未定義にします。未定義のシンボルに対してこの関数を実行すると、単に無視されます。未定義のシンボルを指定したときにエラーを起こさせるには、アトリビュート `:raise` を指定します。

2.6. イテレータ生成

`fill (n:number, value?) {block?}`

引数 `n` で指定した数だけ同じ値 `value` を返すイテレータを生成します。引数 `value` を省略すると `nil` 値になります。

`block` をつけると、要素ごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|value, idx:number|` で、`value` に関数に渡した `value` の値、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

`interval (a:number, b:number, samples:number):map:[open,open_l,open_r] {block?}`

条件 $a \leq x \leq b$ を満たす `x` の数列を引数 `samples` で指定した数だけ等間隔で生成するイテレータを返します。アトリビュートを指定することで、条件を以下のように変えることができます。

`:open_l` $a < x \leq b$

`:open_r` $a \leq x < b$

`:open` $a < x < b$ (アトリビュートに `:open_l:open_r` と指定したのと同じです)

`block` をつけると、要素ごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|num:number, idx:number|` で、`num` に生成した数値、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

`range (num:number, num_end?:number, step?:number):map {block?}`

引数 `num` のみを指定すると、0 から `num-1` までの整数を生成するイテレータを返します。引数 `num` と `num_end` を指定すると、`num` から `num_end-1` までの整数を生成するイテレータを返します。引数 `step` で数値の間隔を指定します。省略すると間隔が 1 になります。

`block` をつけると、要素ごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|num:number, idx:number|` で、`num` に生成した数値、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

`iterator (value+) {block?}`

引数に指定したデータからイテレータを生成し、それを結合したイテレータを返します。

`block` をつけると、要素ごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|value, idx:number|` で、`value` に要素の値、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

2.7. フォーマット変換

`format(format:string, values*):map`

`printf` 関数のフォーマットでデータを文字列に変換します。フォーマット中に記述する指定子については `printf` の説明をご覧ください。

`zipv(values+) {block?}`

引数 `values` で指定した値をまとめたリストを生成します。`values` がすべてスカラーの場合、ひとつのリストを返します。`values` の中にリストまたはイテレータが含まれる場合、その要素ごとにリストに変換します。このとき、リストまたはイテレータが 2 つ以上含まれていると、そのうち最も要素数が少ない数だけリストに変換します。

2.8. モジュール

`import(`module, `alias?):[overwrite] {block?}`

モジュールをインポートします。詳細は「[Gura 言語マニュアル](#)」を参照ください。

`module() {block}`

生成したローカルモジュールの中で `block` の内容を評価した後、そのモジュールへの参照を返します。

2.9. データ型チェック

`istype(value, type:expr):map`

引数 `value` が `type` で表わされる型のデータのとき、`true` を返します。組み込みオブジェクトの型をチェックするために、以下のコンビニエンス関数が用意されています。

関数	等価な呼び出し
<code>isbinary(value)</code>	<code>istype(value, `binary)</code>
<code>isboolean(value)</code>	<code>istype(value, `boolean)</code>
<code>isclass(value)</code>	<code>istype(value, `class)</code>
<code>iscomplex(value)</code>	<code>istype(value, `complex)</code>
<code>isdatetime(value)</code>	<code>istype(value, `datetime)</code>
<code>isdict(value)</code>	<code>istype(value, `dict)</code>
<code>isenvironment(value)</code>	<code>istype(value, `environment)</code>
<code>iserror(value)</code>	<code>istype(value, `error)</code>
<code>isexpr(value)</code>	<code>istype(value, `expr)</code>
<code>isfunction(value)</code>	<code>istype(value, `function)</code>
<code>isiterator(value)</code>	<code>istype(value, `iterator)</code>
<code>islist(value)</code>	<code>istype(value, `list)</code>
<code>ismatrix(value)</code>	<code>istype(value, `matrix)</code>
<code>ismodule(value)</code>	<code>istype(value, `module)</code>
<code>isnumber(value)</code>	<code>istype(value, `number)</code>
<code>issemaphore(value)</code>	<code>istype(value, `semaphore)</code>

Gura ライブラリリファレンス

<code>isstring(value)</code>	<code>istype(value, `string)</code>
<code>issymbol(value)</code>	<code>istype(value, `symbol)</code>
<code>istimedelta(value)</code>	<code>istype(value, `timedelta)</code>
<code>isuri(value)</code>	<code>istype(value, `uri)</code>

`isinstance(value, type:expr):map`

引数 `value` が `type` で表わされる型か、その派生クラスのデータの時 `true` を返します。

`typename(`value)`

引数 `value` が未定義のシンボルの場合、`"undefined"` を返します。それ以外の場合、`value` を評価し、その結果のデータ型を文字列で返します。

`isdefined(`symbol)`

引数 `symbol` が定義済みのシンボルの場合に `true`、未定義のときに `false` を返します。

2.10. 演算・統計

`choose(index:number, values+):map`

引数 `values` に 1 つ以上の値を列挙したとき、引数 `index` で指定した位置にある `values` の値を返します。例えば、`choose(2, 'one', 'two', 'three')` は `'three'` を返します。

`cond(flag:boolean, value1, value2):map`

引数 `flag` が `true` のとき `value1`、`false` のとき `value2` の値を返します。

`max(values+):map`

引数 `values` に列挙した値のうち、最大の値を返します。

`min(values+):map`

引数 `values` に列挙した値のうち、最少の値を返します。

`mod(n, m):map`

引数 `n` を `m` で割った余りを返します。

2.11. スクリプト評価

`eval(expr:expr):map`

引数 `expr` の内容を現在の環境で評価し、その結果を返します。

2.12. 乱数

`randseed(seed:number)`

乱数のシードを設定します。

`rand(range?:number)`

引数を指定しない場合、0 以上 1 未満の範囲で乱数を発生します。引数 `range` を指定すると、0 から `(range - 1)` までの整数を返します。`range` が整数でない場合、整数に丸められます。

```
randn(num?:number, range?:number) {block?}
```

引数 `num` で指定した数だけ乱数を発生するイテレータを返します。引数 `range` を指定しない場合、0 以上 1 未満の範囲で乱数を発生します。引数 `range` を指定すると、0 から (`range - 1`) までの整数を返します。`range` が整数でない場合、整数に丸められます。

`block` をつけると、ひとつの乱数ごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|num:number, idx:number|` で、`num` に生成した乱数、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

2.13. その他

```
dir(obj?):[noesc]
```

引数 `obj` に属している関数や変数のシンボルをリストで返します。`obj` の種類によってシンボルの内容は以下ようになります。

obj の種類	シンボルの内容
モジュール	モジュール内の関数、変数
クラス (コンストラクタ関数)	メソッド、プロパティ
オブジェクト	メソッド、プロパティ

アトリビュート `:noesc` をつけると、`obj` の種類がクラスの場合、派生元のメソッドおよびプロパティは除外します。

```
help(func:function):map:void
```

関数 `func` のヘルプを標準出力に表示します。

3. 定義済み変数

変数	内容
root	トップレベルスコープの environment インスタンスを返します。 モジュール内からトップレベルスコープに変数や関数を追加するときに参照します。

4. 組込みクラス

4.1. object クラス

4.1.1. 概要

すべてのオブジェクトの基本クラスになるクラスです。

4.1.2. インスタンスの生成

`object()`

`object` 型インスタンスを生成します。

4.2. binary クラス

4.2.1. 概要

`binary` クラスは、バイナリデータを保持してするインスタンスを生成するクラスです。`string` クラスとよく似ていますが、`string` クラスのインスタンスで保持されるデータが **UTF-8** エンコーディングされた文字データに限られ、操作も文字単位であることに対し、`binary` クラスは任意のバイナリデータを扱え、処理単位も **8bit** 幅のデータになります。

また、`string` クラスはインスタンスの内容を更新することができませんが、`binary` クラスのインスタンスはデータを追加したり既存のデータを書き換えることができます。この特徴により、`binary` クラスのインスタンスを `stream` に変換して、ストリームデータの出力先として扱うことができます。

4.2.2. インスタンスの生成

コンストラクタ関数 `binary` を使ってインスタンスを生成します。

`binary(buff*)`

複数のデータを結合した結果を `binary` 型として返します。引数 `buff` には `string` 型または `binary` 型のデータを 0 個以上指定します。データを指定しない場合は、空の `binary` 型データを生成します。これは、バイナリリテラルで `b''` と指定したのと同じです。`string` 型は **UTF-8** エンコードの内部表現をそのままバイナリ列として結合します。

4.2.3. クラスメソッド

`binary.pack(format:string, value*):map`

引数 `fomat` で指定したフォーマットに基づいて、`value` の内容を埋め込んだバイナリデータを `binary` 型として返します。`format` 中には、データの個数を表す数値に続いて以下の指定子を記述します。

指定子	説明
<code>x</code>	データを埋め込まず、アドレスを指定のバイト数分だけ進めます。
<code>c</code>	<code>string</code> 型データをとり、文字列の最初の 1 バイトをバイナリ列に挿入します。
<code>b</code>	<code>number</code> 型データをとり、符号付きバイト数値としてバイナリ列に挿入します。

B	number 型データを取り、符号無しバイト数値としてバイナリ列に挿入します。
h	number 型データを取り、符号付き 2 バイト数値としてバイナリ列に挿入します。
H	number 型データを取り、符号無し 2 バイト数値としてバイナリ列に挿入します。
i	number 型データを取り、符号付き 4 バイト数値としてバイナリ列に挿入します。
I	number 型データを取り、符号無し 4 バイト数値としてバイナリ列に挿入します。
l	number 型データを取り、符号付き 4 バイト数値としてバイナリ列に挿入します。
L	number 型データを取り、符号無し 4 バイト数値としてバイナリ列に挿入します。
q	number 型データを取り、符号付き 8 バイト数値としてバイナリ列に挿入します。
Q	number 型データを取り、符号無し 8 バイト数値としてバイナリ列に挿入します。
f	number 型データを取り、float 数値 (4 バイト) としてバイナリ列に挿入します。
d	number 型データを取り、double 数値 (8 バイト) としてバイナリ列に挿入します。
s	string 型データを取り、指定の文字エンコードに変換してバイナリ列に挿入します。文字エンコード名は、format 中にブレース記号 "{" および "}" で囲んで指定します。この指定子の場合、先行する個数を表す数値は、変換した結果からバイナリ列に挿入するバイト数になります。

2 バイト、4 バイト、8 バイト数値のバイトオーダーは以下の指定子で変更できます。

指定子	説明
@	以降の数値フォーマットをシステム依存のエンディアンに設定します。
=	以降の数値フォーマットをシステム依存のエンディアンに設定します。
<	以降の数値フォーマットをリトルエンディアンに設定します。
>	以降の数値フォーマットをビッグエンディアンに設定します。
!	以降の数値フォーマットをビッグエンディアンに設定します。

データの個数として数値の代わりにアスタリスク記号 "*" を指定すると、引数から数値データを取りだし、それをデータの個数とします。

4.2.4. インスタンスメソッド

`binary#add(buff+:binary):map:reduce`

binary インスタンスに他の binary を追加します。

`binary#decode(codec:codec)`

binary の内容を codec で指定した文字コーデックを使ってデコードし、結果を string 型で返します。

`binary#dump():void:[upper]`

binary の内容を標準出力にダンプ表示します。アルファベットは小文字で表示されますが、アトリビュート :upper をつけると大文字になります。

`binary#each() {block?}`

binary の内容を 1 バイトずつとりだし、number 型で返すイテレータを生成します。

`block` をつけると、1 バイトとりだすごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|num:number, idx:number|` で、`num` にとりだしたバイト数値、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

`binary#len()`

バイト数を返します。

`binary#pointer(offset:number => 0)`

`t.b.d.`

`binary#reader() {block?}`

読み込み用ストリームに変換した結果を返します。

`binary#store(offset:number, buff+:binary):map:reduce`

`binary` インスタンスの、指定の位置に他の `binary` の内容を格納します。引数 `offset` はバイト単位で指定します。現在のサイズを超えたところに格納位置を指定すると、そこまでの範囲を 0 で埋めます。

`binary#unpack(format:string, offset:number => 0)`

引数 `format` で指定したフォーマットに基づいて、バイナリデータから数値や文字列を抽出し、その結果をリストで返します。引数 `offset` は、抽出する位置をバイト単位で指定します。指定した位置がバイナリデータの範囲外になるとエラーになります。

`format` 中には、データの個数を表す数値に続いて以下の指定子を記述します。

指定子	説明
<code>x</code>	抽出はせず、アドレスを指定のバイト数分だけ進めます。
<code>c</code>	1 バイトを抽出し、それを文字コードとした <code>string</code> 型データを返します。
<code>b</code>	1 バイトを抽出し、それを符号付きバイト数値とした <code>number</code> 型データを返します。
<code>B</code>	1 バイトを抽出し、それを符号無しバイト数値とした <code>number</code> 型データを返します。
<code>h</code>	2 バイトを抽出し、それを符号付き 2 バイト数値とした <code>number</code> 型データを返します。
<code>H</code>	2 バイトを抽出し、それを符号無し 2 バイト数値とした <code>number</code> 型データを返します。
<code>i</code>	4 バイトを抽出し、それを符号付き 4 バイト数値とした <code>number</code> 型データを返します。
<code>I</code>	4 バイトを抽出し、それを符号無し 4 バイト数値とした <code>number</code> 型データを返します。
<code>l</code>	4 バイトを抽出し、それを符号付き 4 バイト数値とした <code>number</code> 型データを返します。
<code>L</code>	4 バイトを抽出し、それを符号無し 4 バイト数値とした <code>number</code> 型データを返します。
<code>q</code>	8 バイトを抽出し、それを符号付き 8 バイト数値とした <code>number</code> 型データを返します。
<code>Q</code>	8 バイトを抽出し、それを符号無し 8 バイト数値とした <code>number</code> 型データを返します。
<code>f</code>	4 バイトを抽出し、それを <code>float</code> 数値とした <code>number</code> 型データを返します。
<code>d</code>	8 バイトを抽出し、それを <code>double</code> 数値とした <code>number</code> 型データを返します。
<code>s</code>	指定の文字エンコードで文字列に変換した結果を <code>string</code> 型データで返します。文字エンコード名は、 <code>format</code> 中にブレース記号 <code>"{"</code> および <code>"}"</code> で囲んで指定します。この指定子の場合、先行する個数を表す数値は、変換した結果からバイナリ列から抽出するバ

	イト数になります。
--	-----------

2 バイト、4 バイト、8 バイト数値のバイトオーダーは以下の指定子で変更できます。

指定子	説明
@	以降の数値フォーマットをシステム依存のエンディアンに設定します。
=	以降の数値フォーマットをシステム依存のエンディアンに設定します。
<	以降の数値フォーマットをリトルエンディアンに設定します。
>	以降の数値フォーマットをビッグエンディアンに設定します。
!	以降の数値フォーマットをビッグエンディアンに設定します。

```
binary#unpacks(format:string, offset:number => 0, cnt?:number) {block?}
```

引数 `fomat` で指定したフォーマットに基づいて、バイナリデータから数値や文字列を抽出するイテレータを返します。引数 `format` と `offset` の意味は `binary#unpack` と同じです。`cnt` は抽出する回数を指定し、これが省略されるとバイナリデータの終端まで抽出を続けます。

`block` をつけると、データを抽出するごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|elems[], idx:number|` で、`elems` に抽出結果、`idx` に 0 から始まるインデクス番号が入ります。

```
binary#writer() {block?}
```

書き込み用ストリームに変換した結果を返します。初期のオフセットは `binary` の終端に設定され、書きこんだデータは追記されていきます。

4.3. codec クラス

4.3.1. 概要

Gura の文字列の内部コードである UTF-8 と他のエンコーディングとで文字コードを変換するクラスです。

4.3.2. インスタンスの生成

コンストラクタ関数 `codec` を使ってインスタンスを生成します。

```
codec(encoding:string, process_eol:boolean => false)
```

指定したエンコーディング名に対応する `codec` 型インスタンスを返します。引数 `encoding` にエンコーディング名を指定します。対応する `codec` がない場合はエラーになります。`process_eol` は行末コードの変換の有無を表し、`true` を指定すると CR-LF コードと LF コードの変換を行います。`false` の場合はこの変換を行いません。

4.3.3. クラスメソッド

```
codec.dir()
```

利用可能な文字コードの名前の一覧をリストで返します。

4.3.4. インスタンスメソッド

```
codec#decode(buff:binary):map
```

引数 `buff` の内容をデコードした結果を `string` 型で返します。

```
codec#encode(string:string):map
```

引数 `string` の内容をエンコードした結果を `binary` 型で返します。

4.4. color クラス

4.4.1. 概要

赤・緑・青およびアルファ値から成る色データを表現するクラスです。

4.4.2. インスタンスの生成

```
color(name, alpha?:number):map
```

指定した名前に対応する `color` インスタンスを生成します。引数 `name` に、`string` 型または `symbol` 型で色の名前を指定します。色の名前は **Web 標準カラー名** および **X11 色名称** 中ののひとつを選択します。引数 `alpha` にはアルファ値を **0** から **255** の間の数値で指定します。

```
color(red:number, green:number, blue:number, alpha?:number):map
```

指定した **RGB 値** を持つ `color` インスタンスを生成します。引数 `red`、`green` および `blue` に **0** から **255** の間の数値で **RGB 値** を指定します。引数 `alpha` にはアルファ値を **0** から **255** の間の数値で指定します。

4.4.3. Web 標準カラー名

Web 標準カラー名と RGB 値を以下にまとめます。

名前	RGB 値	名前	RGB 値
black	0, 0, 0	silver	192, 192, 192
maroon	128, 0, 0	red	255, 0, 0
green	0, 128, 0	lime	0, 255, 0
olive	128, 128, 0	yellow	255, 255, 0
navy	0, 0, 128	blue	0, 0, 255
purple	128, 0, 128	fuchsia	255, 0, 255
teal	0, 128, 128	aqua	0, 255, 255
gray	128, 128, 128	white	255, 255, 255

4.4.4. クラスプロパティ

プロパティ	型	R/W	説明
names	string	R	カラー名の一覧が格納されています

4.4.5. インスタンスプロパティ

プロパティ	型	R/W	説明
red	number	R/W	赤要素を 0 から 255 までの数値で表します

green	number	R/W	緑要素を 0 から 255 までの数値で表します
blue	number	R/W	青要素を 0 から 255 までの数値で表します
alpha	number	R/W	アルファ要素を 0 から 255 までの数値で表します
gray	number	R	グレイ値を取得します。この値は、赤要素 R、緑要素 G および青要素 B の値をもとに以下の演算式で算出したものです。 $0.299 * R + 0.587 * G + 0.114 * B$

4.4.6. インスタンスメソッド

`color#html()`

色データを HTML で使われる "#rrggbb" の形式にした文字列を返します。

`color#tolist():[alpha]`

色データを赤・緑・青の順に並べたリストに変換します。アトリビュート :alpha をつけるとアルファ要素もいれ、赤・緑・青・アルファの順に並べたリストにします。

4.4.7. キャスト

以下のデータから color クラスのインスタンスにキャストできます。

- 色名を表す文字列またはシンボル
- 赤・緑・青または赤・緑・青・アルファ値を要素に持つリスト

4.5. dict クラス

4.5.1. インスタンスの生成

`dict(elem[1]?):[icase] {block?}`

dict 型インスタンスを生成します。引数 elem にリスト形式で辞書データを指定します。

リストの内容はキーと値を以下のように並べたものになります。

```
dict([key, value, key, value, ..])
dict([[key, value], [key, value], ..])
dict([key => value, key => value, ..])
```

block を指定すると、その内容を辞書データに追加します。ブロックの内容はキーと値を以下のように並べたものになります。

```
dict {key, value, key, value, ..}
dict {[key, value], [key, value], ..}
dict {key => value, key => value, ..}
```

デフォルトでは、キーに文字列を指定した場合大文字と小文字を区別します。アトリビュート icase を指定すると、大文字・小文字を区別しない辞書を生成します。

`%{block}`

block の内容を辞書データに追加した dict 型インスタンスを生成します。ブロックの内容はキーと値を以下のように並べたものになります。

```
%{key, value, key, value, ..}
%{[key, value], [key, value], ..}
%{key => value, key => vakuue, ..}
```

4.5.2. インスタンスメソッド

`dict#clear()`

辞書の内容を消去します。

`dict#erase(key):map`

引数 `key` で指定したキーに対応するエントリを削除します。

`dict#get(key, default?:nomap):map:[raise]`

引数 `key` で指定したキーに対応するエントリの値を返します。

対応するエントリが存在しない場合は `default` で指定した値を返します。`default` を省略したとき、この値は `nil` になります。

引数 `default` にはアトリビュート:`nomap` がついており、暗黙的マッピングの展開がされません。これにより、デフォルト値としてリストやイテレータを指定することができます。

アトリビュート `:raise` をつけると、対応するエントリが存在しない場合はエラーになります。`default` の値は無視されます。

`dict#gets(key, default?):map:[raise]`

引数 `key` で指定したキーに対応するエントリの値を返します。

対応するエントリが存在しない場合は `default` で指定した値を返します。`default` を省略したとき、この値は `nil` になります。

引数 `default` は暗黙的マッピングの対象になります。つまり、例えば `key` と `default` にリストが指定された場合、`key[0]` と `default[0]`、`key[1]` と `default[1]` ... が対応するペアになります。

`dict#haskey(key):map`

引数 `key` で指定したキーに対応するエントリが存在するとき `true`、存在しない場合 `false` を返します。

`dict#items() {block?}`

キーと値を組にしたリストを順に返すイテレータを生成します。

`block` をつけると、データを抽出するごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|item[], idx:number|` で、`item` にキーと値を組にしたリスト、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

`dict#keys() {block?}`

キーを順に返すイテレータを生成します。

`block` をつけると、データを抽出するごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|key, idx:number|` で、`key` にキー値、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

`dict#values() {block?}`

値を順に返すイテレータを生成します。

Gura ライブラリリファレンス

`block` をつけると、データを抽出するごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|value, idx:number|` で、`value` に値、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

`dict#len()`

辞書のサイズを返します。

`dict#set(key, value:nomap):map:reduce`

指定のキーと値を持ったエントリを追加します。`dict` インスタンス自身を戻り値として返します。

`dict#setdefault(key, value:nomap):map`

キーが存在しない場合、指定のキーと値を持ったエントリを追加して `value` の値を返します。キーがすでに存在した場合は新たなエントリを追加せず、既存のエントリの値を返します。

`dict#sets(key, value):map:void`

`t.b.d.`

`dict#store(elems?):reduce:[default] {block?}`

引数 `elems` に指定したリストまたは `dict` 型の内容を追加します。

変数 `d` が `dict` のインスタンスとすると、リストの内容はキーと値を以下のように並べたものになります。

```
d.store([key, value, key, value, ..])
d.store([[key, value], [key, value], ..])
d.store([key => value, key => value, ..])
```

`block` を指定すると、その内容を辞書データに追加します。ブロックの内容はキーと値を以下のように並べたものになります。

```
d.store {key, value, key, value, ..}
d.store {[key, value], [key, value], ..}
d.store {key => value, key => value, ..}
```

アトリビュート `:default` をつけると、キーがすでに辞書に存在した場合何もしません。

4.6. environment クラス

4.6.1. インスタンスの生成

- 関数 `locals` でインスタンスを生成します。
- 関数 `outers` でインスタンスを生成します。

4.6.2. インスタンスメソッド

`environment#eval(expr:expr):map`

`environment` のスコープ内で `expr` の内容を評価します。

`environment#lookup(symbol:symbol, escalate:boolean => true):map`

`environment` 内で `symbol` に対応する定義値を返します。引数 `escalate` に `true` を指定すると、`environment` で定義値が見つからないとき外部スコープも探索します。

4.7. error クラス

4.7.1. インスタンスの生成

- 以下のインスタンスがあらかじめ定義されています。
`SyntaxError`, `ArithmeticError`, `Error`, `TypeError`, `ZeroDivisionError`, `ValueError`,
`SystemError`, `IOError`, `IndexError`, `KeyError`, `ImportError`, `AttributeError`,
`StopIteration`, `RuntimeError`, `NameError`, `NotImplementedError`, `IteratorError`,
`CodecError`, `CommandError`, `MemoryError`, `FormatError`, `ResourceError`
- 関数 `except` のブロックパラメータとして渡されます。

4.7.2. インスタンスメソッド

t.b.d

4.8. expr クラス

4.8.1. インスタンスの生成

- Gura の任意の式の先頭にオペレータ `"`"` をつけると、`expr` クラスのインスタンスになります。

4.8.2. Expr 要素と判定メソッド

`expr` クラスは Gura 文法の構成要素である **Expr** 要素を表現します。**Expr** の要素と、それらのうちのどれを `expr` インスタンスが表現しているか判定するメソッドは以下のとおりです。

Expr 要素	判定メソッド
Assign	<code>expr#isassign()</code>
Binary	<code>expr#isbinary()</code>
BinaryOp	<code>expr#isbinaryop()</code>
Block	<code>expr#isblock()</code>
BlockParam	<code>expr#isblockparam()</code>
Caller	<code>expr#iscaller()</code>
Container	<code>expr#iscontainer()</code>
DictAssign	<code>expr#isdictassign()</code>
Field	<code>expr#isfield()</code>
Force	<code>expr#isforce()</code>
Indexer	<code>expr#isindexer()</code>
Lister	<code>expr#islister()</code>
Prefix	<code>expr#isprefix()</code>
Quote	<code>expr#isquote()</code>
String	<code>expr#isstring()</code>
Suffix	<code>expr#issuffix()</code>

Symbol	<code>expr#issymbol()</code>
Unary	<code>expr#isunary()</code>
UnaryOp	<code>expr#isunaryop()</code>
Value	<code>expr#isvalue()</code>

4.8.3. 要素を参照するインスタンスメソッド

`expr#block()`

caller 要素が持つ `block` の内容を `expr` 型で返します。

`expr#car()`

compound 要素が持つ `car` の内容を `expr` 型で返します。

`expr#cdr()`

compound 要素が持つ `cdr` の内容を `expr` 型で返します。

`expr#child()`

unary 要素が持つ `child` の内容を `expr` 型で返します。

`expr#each() {block?}`

container 要素が持つ子要素の内容を `expr` 型で返すイテレータを生成します。

`block` をつけると、子要素ごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|expr:expr, idx:number|` で、`expr` に子要素、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

`expr#getstring()`

string 要素の文字列データを返します。

`expr#getsymbol()`

symbol 要素のシンボル値を返します。

`expr#getvalue()`

value 要素の値を返します。

`expr#left()`

binary 要素の左側要素の内容を `expr` 型で返します。

`expr#right()`

binary 要素の右側要素の内容を `expr` 型で返します。

4.8.4. その他のインスタンスメソッド

`expr#eval()`

`expr` の内容を現在の環境で評価します。

`expr#exprname()`

要素名を文字列で返します。

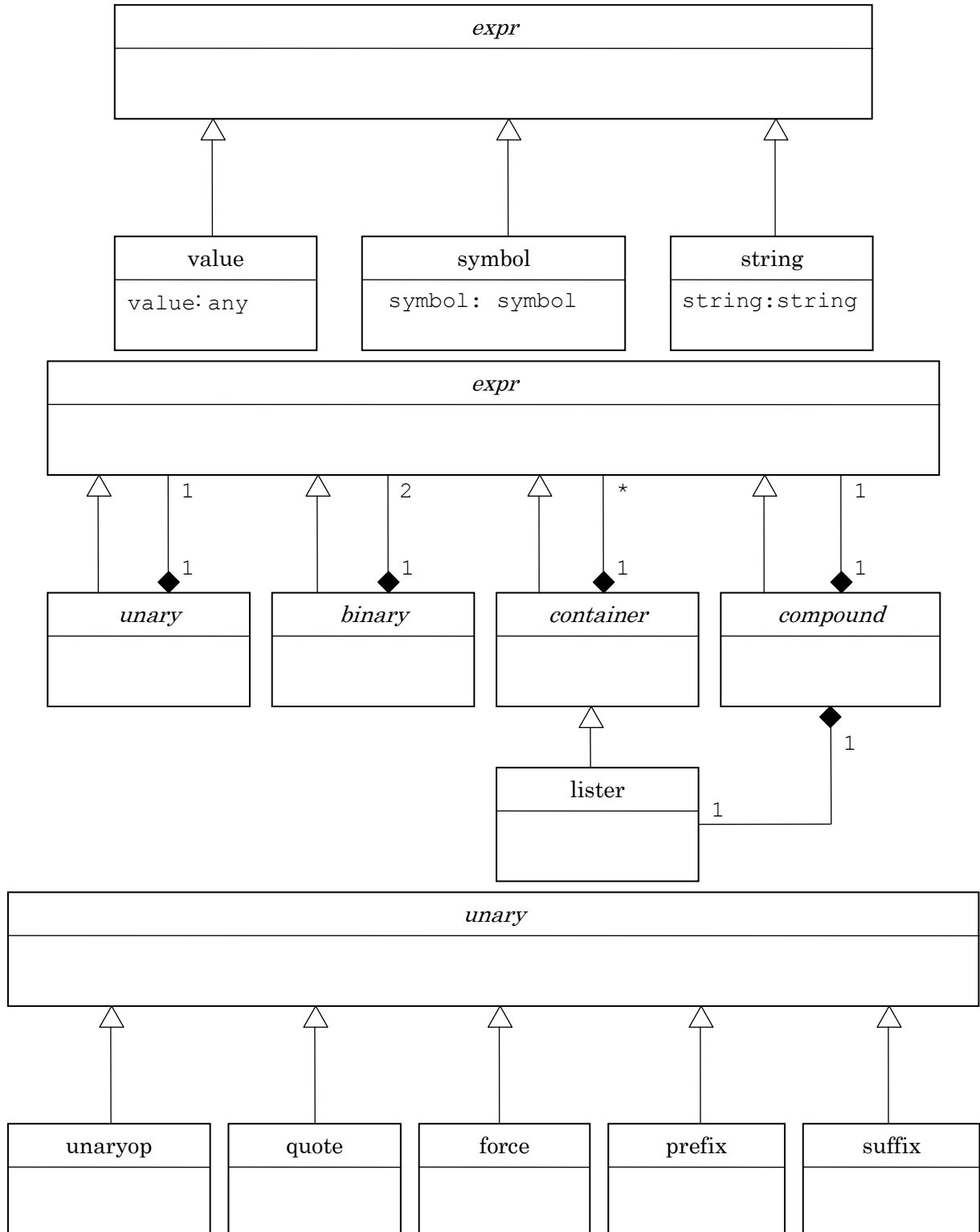
`expr#tofunction(`args*)`

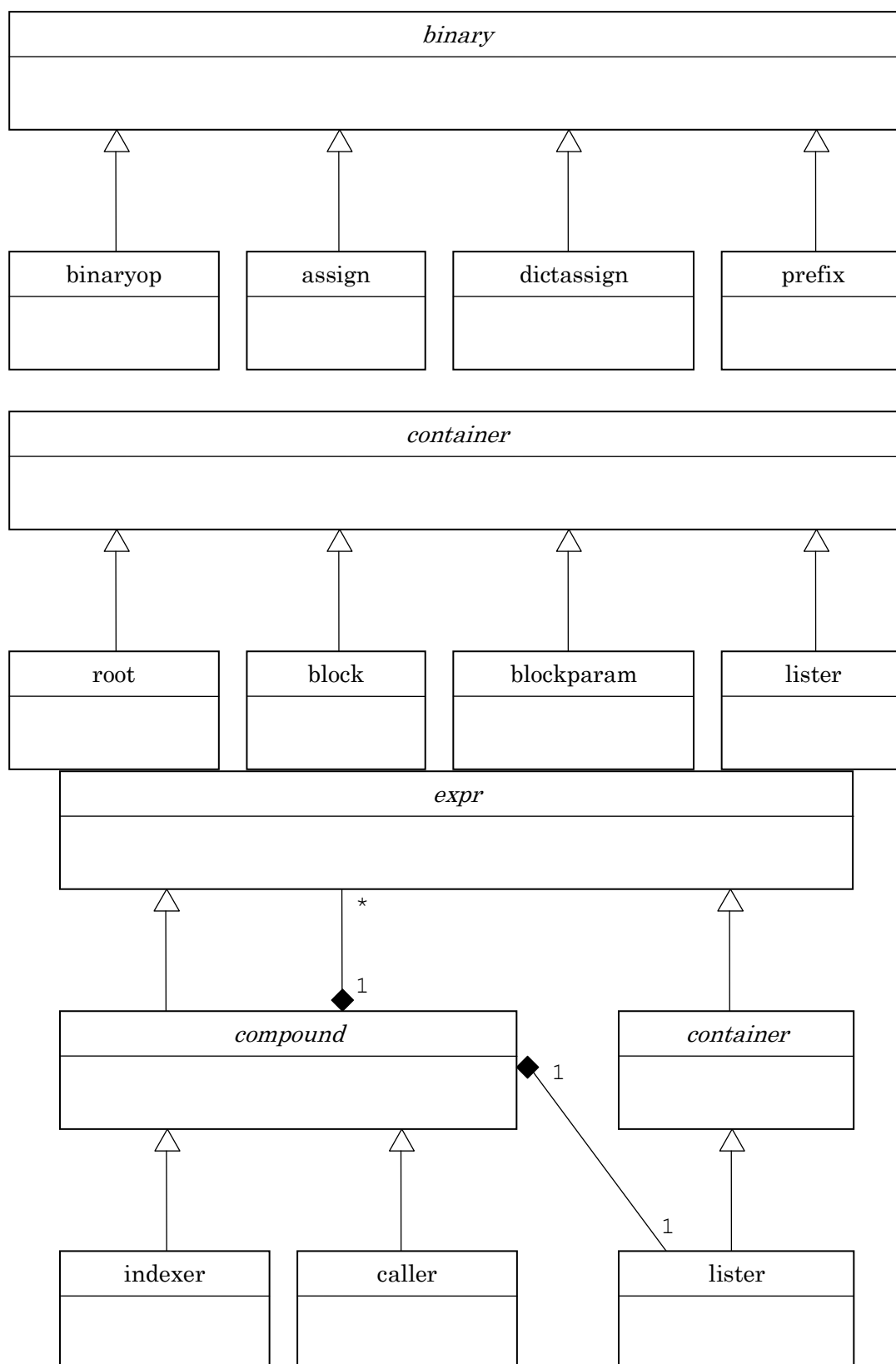
指定した引数列を持つ関数に変換します。

`expr#unquote()`

`expr` の内容が `quote` されているとき、それを取り除きます。

4.8.5. 式を構成する要素





4.9. function クラス

4.9.1. インスタンスの生成

```
function(`args*`) {block}
```

block に記述した手続きを持つ function 型インスタンスを生成して返します。引数リストを args で指定します。args が省略され、block にブロックパラメータがある場合、ブロックパラメータを引数リストとして扱います。

args もブロックパラメータも無い場合、block 中にドル記号 "\$" を先頭に持つシンボルがあると、それらのシンボルを引数リストに追加します。引数の並びは出現した順になります。

&{block}

block に記述した手続きを持つ function 型インスタンスを生成して返します。block にブロックパラメータがある場合、ブロックパラメータを引数リストとして扱います。

ブロックパラメータが無い場合、block 中にドル記号 "\$" を先頭に持つシンボルがあると、それらのシンボルを引数リストに追加します。引数の並びは出現した順になります。

4.9.2. インスタンスプロパティ

プロパティ	型	R/W	説明
symbol	symbol	R/W	関数の名前を文字列で返します
name	string	R/W	関数のシンボルを返します
fullname	string	R	関数のフルネームを文字列で返します。 <ul style="list-style-type: none"> ● インスタンスメソッドの場合: メソッドが属しているクラス名と関数名をシャープ記号 "#" でつなげた文字列を返します。 ● クラスメソッドの場合: メソッドが属しているクラス名と関数名をドット記号 "." でつなげた文字列を返します。 ● モジュール内の関数の場合: モジュール名と関数名をドット記号 "." でつなげた文字列を返します。
args	list	R	関数の引数リストで宣言されている変数シンボルのリストです
expr	expr	R	関数の本体です
help	string	R/W	関数のヘルプを返します。 文字列を代入すると、それを新たなヘルプとして登録します。

4.9.3. インスタンスメソッド

function#diff(var?:symbol)

関数の内容を数学の微分公式に沿って微分し、その結果の式を function インスタンスで返します。引数 var で変数名のシンボルを指定すると、その変数に対する微分を行います。省略した場合、関数の最初の引数に対して微分を行います。

関数の内容は以下の条件を満たしている必要があります。

- 複数の式を含まないこと
- math モジュールの関数と四則演算およびべき乗からなる式であること

4.10. image クラス

4.10.1. インスタンスの生成

```
image(stream:stream:r, format?:symbol, imgtype?:string):map {block?}
```

引数 `stream` で指定したストリームを読み込んでイメージデータを構築します。引数 `format` は内部データ表現を表し、``rgb`` または ``rgba`` を指定します。読み込むデータのフォーマットは自動で識別されますが、引数 `imgtype` で明示的に指定することができます。指定可能なフォーマットは、モジュールをインポートすることで追加できます。

```
image(format:symbol):map {block?}
```

バッファを持たないイメージデータを作ります。引数 `format` は内部データ表現を表し、``rgb`` または ``rgba`` を指定します。

```
image(format:symbol, width:number, height:number, color?:color):map {block?}
```

指定のサイズを持ったブランクイメージデータを作ります。引数 `format` は内部データ表現を表し、``rgb`` または ``rgba`` を指定します。`width` および `height` にそれぞれ幅と高さを指定します。デフォルトではイメージの内容は黒で塗りつぶされますが、引数 `color` で塗りつぶす色を指定できます。

4.11. インスタンスメソッド

```
image#allocbuff(width:number, height:number, color?:color):void
```

バッファを持たないイメージインスタンスに、指定の大きさのバッファを確保します。引数 `color` に、バッファを塗りつぶす色を指定します。省略した場合、黒で塗りつぶします。

```
image#crop(x:number, y:number, width?:number, height?:number):map
```

イメージの一部分をとりだして、新しい `image` インスタンスを生成します。引数 `x`, `y` に抽出する領域の左上座標を指定します。引数 `width`, `height` には、抽出する大きさを指定します。これらを省略した場合、イメージの右端および下端までを抽出します。

```
image#delpalette():reduce
```

イメージに関連付けられたパレットを削除します。

```
image#each(x?:number, y?:number, width?:number, height?:number, scandir?:symbol) {block?}
```

イメージのピクセル色データを順に走査して `color` 型のデータを返すイテレータを生成します。`x`、`y`、`width`、`height` に走査範囲、`scandir` に走査方向を指定します。`scandir` で指定できるシンボル値は以下のとおりです。

(`scandir` の指定はまだ未実装)。

`block` をつけると、ピクセルごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|color:color, idx:number|` で、`color` にピクセルの色データ、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

```
image#extract(x:number, y:number, width:number, height:number, element:symbol, dst):void
```

`t.b.d.`

```
image#fill(color:color):void
```

Gura ライブラリリファレンス

イメージ全体を指定した色で塗りつぶします。

```
image#fillrect(x:number, y:number,  
               width:number, height:number, color:color):map:void
```

指定の範囲を指定した色で塗りつぶします。

```
image#flip(orient:symbol):map
```

イメージを左右または上下反転させた新しい image インスタンスを生成します。引数 orient に指定できるシンボル値は以下のとおりです。

```
`horz    左右反転  
`vert    上下反転  
`both    左右および上下反転。これはイメージを 180 度回転させたことと同じです。
```

```
image#getpixel(x:number, y:number):map
```

指定の位置の色データを color 型で返します。

```
image#paste(x:number, y:number, src:image, width?:number, height?:number,  
            xoffset:number => 0, yoffset:number => 0, alpha:number => 255):map:reduce
```

引数 x、y で指定した位置にイメージ src の画像内容をコピーします。引数 width、height はコピーする幅および高さを表し、これらを省略すると画像全体をコピーします。xoffset、yoffset はコピー元のオフセット座標です。引数 alpha を指定すると、コピーの際のブレンド比率を指定できます。alpha が 0 で 0%、255 で 100%です。

```
image#putpixel(x:number, y:number, color:color):map:void
```

引数 x、y で指定した位置のピクセル色データを color に変更します。

```
image#read(stream:stream, imgtype?:string):map:reduce
```

引数 stream からイメージデータを読み込みます。このメソッドを実行するイメージインスタンスは、バッファが未確保である必要があります。すでにバッファを持っていた場合はエラーになります。

引数 imgtype には、"jpeg" や "png" というようにイメージタイプ名を文字列で指定します。この引数が省略されると、イメージファイルのヘッダ情報やファイル名のサフィックスからイメージタイプを識別します。

```
image#reducecolor(palette?:palette)
```

イメージデータ中の色データを、指定したパレット中の一番近いエントリの色で置き換えたイメージインスタンスを生成して返します。引数 palette を省略すると、イメージが持っているパレットを使って置き換えを行います。このとき、イメージにパレットがない場合はエラーになります。

```
image#resize(width?:number, height?:number):map:[box]
```

イメージを指定の大きさにリサイズしたイメージインスタンスを生成して返します。

width および height にリサイズ結果の大きさを指定します。どちらかを省略した場合、オリジナルの縦横比率を保つようにリサイズされます。アトリビュート:box を指定して、width のみを指定すると、縦横がいずれも width の正方形が指定されます。

```
image#rotate(rotate:number, background?:color):map
```

イメージを引数 `rotate` で指定した角度だけ回転させたイメージインスタンスを生成して返します。
`rotate` の数値は `degree` で表わし、正の数が時計回り、負で反時計回りになります。
引数 `background` は、回転させたときにできる余白を塗りつぶす色を指定します。省略すると、黒で塗りつぶします。

```
image#setalpha(alpha:number, color?:color, alphaRest:number => 255):reduce
```

引数 `color` で指定した色データを持つピクセルのアルファ値を引数 `alpha` の値に置き換えたイメージインスタンスを生成して返します。引数 `color` を省略すると、イメージ全体のアルファ値を `alpha` の値にします。引数 `color` に合致しないピクセルのアルファ値は `alphaRest` の値に置き換えます。

```
image#size()
```

イメージの幅と高さをリストにして返します。

```
image#store(x:number, y:number, width:number, height:number, element:symbol, src):void  
t.b.d.
```

```
image#thumbnail(width?:number, height?:number):map:[box]
```

イメージデータを、縦横比を保存しながら幅 `width`、高さ `height` の範囲内に収まるようリサイズしたイメージインスタンスを生成して返します。指定した範囲よりもイメージが小さい場合、元のイメージへの参照をそのまま返します。引数 `width` のみを指定してアトリビュート `:box` をつけると、幅・高さとも `width` ピクセルの範囲に収まるイメージを生成します。

```
image#write(stream:stream, imgtype?:string):map:reduce
```

引数 `stream` にイメージデータを書き込みます。このメソッドを実行するイメージインスタンスは、バッファを持っている必要があります。バッファを持っていない場合はエラーになります。

引数 `imgtype` には、`"jpeg"` や `"png"` というようにイメージタイプ名を文字列で指定します。この引数が省略されると、ストリームについているファイル名のサフィックスからイメージタイプを識別します。

4.12. iterator クラス

4.12.1. インスタンスの生成

```
iterator(value+) {block?}
```

汎用イテレータ関数です。指定された要素を順次返すイテレータを生成します。
要素がイテレータやリストの場合、それらの要素を返していきます。

```
fill(n:number, value?) {block?}
```

指定の値を指定の数だけ出力するイテレータを生成します。

引数 `n` に生成する個数、`value` に値を指定します。`value` には任意の型のデータを指定できます。
`value` は省略可能で、省略した場合は `nil` 値を要素に持つイテレータになります。

```
rands(num?:number, range?:number) {block?}
```

指定の数だけ乱数を出力するイテレータを生成します。

引数 `num` に生成する個数、`range` に値の上限値を整数で指定します。出力する数値 `x` は $0 < x < range$

を満たす整数値になります。num が省略されると、無限に乱数を出力します。range が省略されると、出力する数値 x は $0 < x < 1$ を満たす小数値になります。

```
range(num:number, num_end?:number, step?:number):map {block?}
```

開始値と終了値、および間隔を指定して連続する数列を出力するイテレータを生成します。

引数 num のみを指定すると、0 から num - 1 までの整数を出力します。

引数 num と num_end を指定すると、num から num_end - 1 までの整数を出力します。

引数 num, num_end および step を指定すると、num を開始値にして、step ごとに数値をインクリメントして num_end を超えない範囲までの数値を出力します。

連続した数値を出力するのに、オペレータ `".."` を使うこともできます。`"n..m"` という形式では、n から m までの整数を出力するイテレータになります。また、`"n.."` と指定すると、n を始点にして、無限にインクリメントするイテレータになります。

```
interval(a:number, b:number, samples:number):map:[open,open_l,open_r] {block?}
```

範囲とサンプル数を指定して数列を出力するイテレータを生成します。一般式は以下のとおりです。引数 a に最小値、b に最大値を指定すると、サンプル数 samples 個だけ、`[a, b]` の範囲内で等間隔な数列を出力します。

アトリビュート:open, :open_l, :open_r を指定すると、範囲のオープン条件を指定できます。:open を指定すると、範囲指定が (a, b) に、:open_l では (a, b]、:open_r では [a, b) になります。

4.12.2. インスタンスメソッド

イテレータが実装するメソッドは、リストのメソッドと大部分が共通しています。共通しているメソッドは list クラスの項に掲載していますので、そちらを参照ください。この項は、イテレータ特有のメソッドを示します。

```
iterator#delay(delay:number) {block?}
```

イテレータの要素を返すたびに引数 delay で指定した秒数だけ遅延します。

block をつけると、イテレータの要素ごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|value, idx:number|` で、value に要素データ、idx に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

```
iterator#isinfinite()
```

イテレータが無限イテレータのとき true、有限イテレータのとき false を返します。

```
iterator#next()
```

イテレータの次の要素の値を返します。

4.13. list クラス

4.13.1. インスタンスの生成

```
list(iter+:iterator), xlist(iter+:iterator)
```

ひとつ以上のイテレータを結合した結果を、ひとつのリストインスタンスとして返します。xlist は、要素から nil 値を取り除きます。

```
@(func?:function) {block?}
```

ブロックの要素をもとにリストを生成します。詳細は「[Gura 言語マニュアル](#)」を参照ください。

```
dim(n+:number) {block?}
```

指定の要素数を持った多重リストを生成して返します。例えば、`dim(2, 3)` は `[[nil, nil, nil], [nil, nil, nil]]` というリストを生成します。要素の値はデフォルトで `nil` ですが、`block` を指定するとブロックの評価値を要素の値とします。ブロックの評価の際 `|i0:number, i1:number, ...|` という形式のブロック引数を渡します。`i0, i1 ...` はループインデクスです。

```
set(iter+:iterator):[and,or,xor], xset(iter+:iterator):[and,or,xor]
```

ひとつ以上のイテレータを結合し、重複した要素をとりのぞいた結果をひとつのリストインスタンスとして返します。`xset` は、要素から `nil` 値を取り除きます。デフォルトでは、イテレータ同士 `or` 論理で結合します。アトリビュート `and` を指定すると、イテレータ間で同じ値を持つ要素のみを抽出します。アトリビュート `xor` を指定すると、イテレータ間で重複しない要素のみを抽出します。

4.13.2. インスタンスメソッド

```
list#add(elem+):reduce
```

リストに、引数 `elem` で表わされる要素を追加します。これは破壊的メソッドです。

```
list#align(n:number, value?):map {block?} / iterator#align(n:number, value?) {block?}
```

リストやイテレータの要素中、`n` 個までの要素を返すイテレータを生成します。リストの要素数が引数 `n` よりも小さい場合、実際の要素数を越えた分は `value` の値を返します。`value` が省略されたとき、その部分は `nil` になります。

`block` をつけると、イテレータの要素ごとにその内容の評価します。ブロックパラメータの形式は `|value, idx:number|` で、`value` に要素データ、`idx` に 0 から始まるインデクス番号が入ります。

```
list#and() / iterator#and()
```

要素間をオペレータ `"&"` で演算した結果を返します。

```
list#append(elem+):reduce
```

リストに、引数 `elem` で表わされる要素を追加します。これは破壊的メソッドです。`elem` がリストまたはイテレータのとき、それらの要素が追加対象になります。

```
list#average() / iterator#average()
```

要素から平均値を算出し、結果を返します。

```
list#clear():reduce
```

要素をすべてとりのぞき、空のリストにします。これは破壊的メソッドです。

```
list#combination(n:number) {block?}
```

リストから、重複しない `n` 個のデータの組み合わせをリストにして返すイテレータを生成します。イテレータの要素数は、リストのデータ数を `m` 個としたとき mC_n になります。

`block` をつけると、組み合わせのリストごとにその内容の評価します。ブロックパラメータの形式は `|elements:list, idx:number|` で、`elements` に組み合わせリスト、`idx` に 0 から始まるインデク

ス番号が入ります。

`list#count(criteria?) / iterator#count(criteria?)`

リストまたはイテレータ中、条件に合致する要素の数を返します。条件 `criteria` には値または関数を指定します。

`criteria` を省略すると、要素中で真値と判断できるものの数を返します。

`criteria` に値を指定した場合、その値と要素を比較し、等しいと判断したものの数を数えます。

`criteria` に渡す関数は、引数を一つとり `boolean` 値を返すものを指定します。`list#count` メソッドは要素をひとつずつ関数に渡し、帰ってきた `true` の数を数えます。

`list#each() {block?} / iterator#each() {block?}`

リストまたはイテレータの要素を順に走査するイテレータを返します。

`block` をつけると、要素ごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|value, idx:number|` で、`value` に要素値、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

`list#erase(idx*:number):reduce`

引数 `idx` で指定される位置の要素をリストから削除します。これは破壊的メソッドです。

`list#filter(criteria) {block?} / iterator#filter(criteria) {block?}`

リストまたはイテレータ中、引数 `criteria` で指定した条件に合致する要素を返すイテレータを生成します。`criteria` に関数を指定すると、各要素を引数にしてその関数を呼び出し、関数が `true` を返したときの要素を抽出します。

`criteria` にリストまたはイテレータを指定すると、`criteria` 中で `true` となる位置のデータを抽出します。

`block` をつけると、要素ごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|value, idx:number|` で、`value` に要素値、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

`list#find(criteria?):[index] / iterator#find(criteria?):[index]`

リストまたはイテレータ中、引数 `criteria` で指定した条件に合致する要素の値を返します。`criteria` を省略すると、`true` と判定される要素の値を返します。アトリビュートに `:index` を指定すると、要素の値ではなくインデックス値を返します。

`criteria` に指定した値の型によって、以下の判定処理を行います。

- 関数を指定すると、`criteria(x)` という形式で要素をその関数の引数として渡し、戻り値が `true` か否かをチェックします。
- リストまたはイテレータを指定すると、その要素が `true` か否かをチェックします。
- その他の値を指定すると、要素がその値と等しいかチェックします。

`list#first()`

リストの最初の要素値を返します。

`list#flat()`

入れ子になったリストをすべて一次元に展開したリストを返します。

Gura ライブラリリファレンス

`list#fold(n:number, nstep?:number):[iteritem] {block?} / iterator#fold(n:number):[iteritem] {block?}`

リストまたはイテレータの要素から `n` 個ずつ組にしたリストを返すイテレータを生成します。引数 `nstep` を指定すると、次に抽出する要素の間隔を指定できます。`nstep` を省略すると、次の抽出位置は `n` 個先になります。アトリビュート:`iteritem` をつけると、組にした結果をリストではなくイテレータで返します。

`block` をつけると、抽出したリストごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|elements:list, idx:number|` で、`elements` に抽出リスト、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

`list#format(format:string):map / iterator#format(format:string) {block?}`

`printf` 関数のフォーマットで、リストまたはイテレータの要素を文字列に変換します。

`list#get(index:number):map:flat`

リスト中、引数 `index` で指定した位置にあるデータを取得します。

`list#head(n:number):map {block?} / iterator#head(n:number):map {block?}`

リストまたはイテレータの最初の `n` 個のデータを返すイテレータを生成します。

`block` をつけると、データごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|value, idx:number|` で、`value` にデータ値、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

`list#iscontain(value) / iterator#iscontain(value)`

リストまたはイテレータの要素中に、`value` と同じ値のデータがある場合 `true` を、ない場合は `false` を返します。

`list#isempty()`

リストの要素が空のとき `true` を返します。ひとつでも要素があれば `false` を返します。

`list#join(sep:string => "") / iterator#join(sep?:string)`

リストまたはイテレータの要素を文字列に変換し、それらを指定の文字列 `sep` で連結します。

`iterator#joinb()`

イテレータで返される `binary` 型の要素を連結した結果を返します。要素が `binary` 型でない場合、エラーになります。

`list#last()`

リストの最後の要素を返します。

`list#len() / iterator#len()`

リストまたはイテレータの要素の数を返します。

`list#map(func:function) {block?} / iterator#map(func:function) {block?}`

リストまたはイテレータから要素の値を関数オブジェクト `func` に引数として渡した結果を返すイテレータを生成します。関数の呼び出しは、要素の値を `value` とすると `func(value)` という形式になります。ブロックを指定すると、生成したイテレータを即座に評価します。このとき、ブロックパラメータの形式は `|valueMapped, idx:number|` となり、`valueMapped` に関数 `func` の戻り値、`idx` に 0 から始まる

インデクス番号が入ります。

```
list#max():[index,last_index,indices] / iterator#max():[index,last_index,indices]
```

アトリビュートを何もつけずに実行したとき、リストまたはイテレータの要素のうち、大小比較をした結果が最も大きかった値を返します。

アトリビュート: `index` をつけると、最も大きな値が最初に見つかったインデクスを返します。アトリビュート: `last_index` では、最も大きな値が最後に見つかったインデクスを返します。

アトリビュート: `indices` をつけると、最も大きな値が複数あった場合、それらすべてのインデクス値をリストにして返します。

```
list#min():[index,last_index,indices] / iterator#min():[index,last_index,indices]
```

アトリビュートを何もつけずに実行したとき、リストまたはイテレータの要素のうち、大小比較をした結果が最も小さかった値を返します。

アトリビュート: `index` をつけると、最も小さな値が最初に見つかったインデクスを返します。アトリビュート: `last_index` では、最も小さな値が最後に見つかったインデクスを返します。

アトリビュート: `indices` をつけると、最も小さな値が複数あった場合、それらすべてのインデクス値をリストにして返します。

```
list#nilto(replace) / iterator#nilto(replace)
```

リストまたはイテレータの要素が `nil` のとき、指定した値に変換します。

```
list#offset(n:number):map {block?} / iterator#offset(n:number) {block?}
```

リストまたはイテレータの先頭から指定の数だけ除外した後の要素を返すイテレータを生成します。

```
list#or() / iterator#or()
```

要素間をオペレータ `"|"` で演算した結果を返します。

```
list#pack(format:string) / iterator#pack(format:string) {block?}
```

引数 `fomat` で指定したフォーマットに基づいて、リストまたはイテレータの要素を埋め込んだバイナリデータを `binary` 型として返します。フォーマットの詳細は `pack` 関数の説明を参照してください。

```
list#permutation(n?:number) {block?}
```

リストから、重複しない n 個のデータの順列組み合わせをリストにして返すイテレータを生成します。イテレータの要素数は、リストのデータ数を m 個としたとき mP_n になります。

`block` をつけると、順列組み合わせのリストごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|elements:list, idx:number|` で、`elements` に順列組み合わせリスト、`idx` に 0 から始まるインデクス番号が入ります。

```
list#pingpong(n?:number):[sticky,sticky_l,sticky_r] {block?} /
```

```
iterator#pingpong(n?:number):[sticky,sticky_l,sticky_r] {block?}
```

リストまたはイテレータの要素を順に走査し、最後に到達したら逆向きに走査、再び最初に戻ったら順に走査を繰り返すイテレータを生成します。

引数 n に走査結果で得られる要素の数を指定します。この引数を省略すると、無限に走査をくりかえす無

限イテレータになります。アトリビュート:sticky, :sticky_l, :sticky_r は先頭または終端で折り返しをするときに要素を 2 度繰り返すか否かを指定します。:sticky_l が先頭要素、:sticky_r が終端要素、:sticky が両端の要素に対する繰り返し指定になります。

```
iterator#print(stream?:stream:w)
```

要素の値を文字列にして stream に出力します。stream を省略した場合、標準出力に出力します。

```
list#printf(format:string, stream?:stream:w):void /
```

```
iterator#printf(format:string, stream?:stream:w)
```

要素の値を printf のフォーマットに従って文字列にし、stream に出力します。stream を省略した場合、標準出力に出力します。

```
iterator#println(stream?:stream:w)
```

要素の値と改行を stream に出力します。

```
list#rank(directive?):[stable] / iterator#rank(directive?) {block?}
```

要素の順番を並べ替えたとき、各要素が位置するインデックス番号を返すイテレータを生成します。

並べ替えの順序はデフォルトで昇順ですが、引数 directive にシンボルまたは関数を指定することで順序を指示することができます。directive に、シンボル`ascend`を指定すると昇順、シンボル`descend`を指定すると降順になります。

directive に関数を渡す場合、この関数は二つの引数を取り、-1, 0, +1 のいずれかの整数値を返すものである必要があります。今、関数の一般式が $f(a, b)$ であるとすると、以下のような値を返すようにします。

昇順: $a < b$ のとき -1、 $a == b$ のとき 0、 $a > b$ のとき +1

降順: $a > b$ のとき +1、 $a == b$ のとき 0、 $a < b$ のとき -1

アトリビュート:stable をつけると、ステابلソートになります。大小比較が等しい要素が複数あったとき、それらの順序がソート前と同じである保障が得られます。

```
list#reduce(accum) {block} / iterator#reduce(accum) {block}
```

要素に対し畳み込み操作を行います。関数を実行すると、リストまたはイテレータから要素をひとつ受取り、この値 value と累積結果 accum の値を |value, accum| というブロックパラメータの形式でブロックに渡します。ブロックの評価結果を新たな accum とし、以下同じ操作を要素ごとに繰り返します。

```
list#replace(value, replace) / iterator#replace(value, replace)
```

要素が value に等しいとき、replace に置き換えるイテレータを生成します。

```
list#reverse() {block?} / iterator#reverse() {block?}
```

要素列を逆から走査するイテレータを生成します。

```
list#round(n?:number) {block?} / iterator#round(n?:number) {block?}
```

リストまたはイテレータの要素を順に走査し、最後に到達したら再び最初に戻るイテレータを生成します。

引数 n に走査結果で得られる要素の数を指定します。この引数を省略すると、無限に走査をくりかえす無限イテレータになります。

Gura ライブラリリファレンス

`list#runlength() {block?} / iterator#runlength() {block?}`

リストまたはイテレータの要素を順に走査し、連続した数とその値をペアにしたものを要素に返すイテレータを生成します。

`list#shift():[raise]`

リストから最初の要素をとりのぞき、その値を返します。

リストが空の時、デフォルトでは何もせず `nil` を返します。アトリビュート: `raise` をつけると空のリストにたいしてこのメソッドを実行するとエラーを発生させます。

`list#shuffle():reduce`

リスト要素の順番を乱数で入れ替えた結果をリストにして返します。

`list#since(criteria) {block?} / iterator#since(criteria) {block?}`

リストまたはイテレータから、条件に合致した時点からの要素を抽出するイテレータを生成します。

`criteria` には関数またはイテレータを指定できます。

関数は、一つの引数を取り `boolean` 値を返すものを指定します。`since` 関数はリストまたはイテレータの要素をひとつずつ関数に渡し、その戻り値が `true` になった時点で抽出を開始します。

`criteria` にイテレータを指定すると、`since` 関数は抽出対象のリストまたはイテレータと同時に `criteria` のイテレータを走査し、これが `true` 値になった時点で抽出を開始します。

`list#skip(n:number):map {block?} / iterator#skip(n:number) {block?}`

指定数だけ要素を除外しながら要素列を走査するイテレータを返します。引数 `n` に除外する要素数を指定します。

`list#skipnil() {block?} / iterator#skipnil() {block?}`

`nil` 要素をとりのぞくイテレータを生成します。

`list#sort(directive?, keys[]?):[stable] {block?} /`

`iterator#sort(directive?, keys[]?):[stable] {block?}`

要素の順番を並べ替えた結果をイテレータで返します。リストで結果を得る場合はアトリビュート: `list` を指定します。

並べ替えの順序はデフォルトで昇順ですが、引数 `directive` にシンボルまたは関数を指定することで順序を指示することができます。`directive` に、シンボル ``ascend` を指定すると昇順、シンボル ``descend` を指定すると降順になります。

`directive` に関数を渡す場合、この関数は二つの引数を取り、`-1`, `0`, `+1` のいずれかの整数値を返すものである必要があります。今、関数の一般式が `f(a, b)` であるとする、以下のような値を返すようにします。

昇順: `a < b` のとき `-1`、`a == b` のとき `0`、`a > b` のとき `+1`

降順: `a > b` のとき `+1`、`a == b` のとき `0`、`a < b` のとき `+1`

`sort` メソッドは、デフォルトではリストの要素そのものの大小で並び替えを行います。引数 `keys` にリストを渡すと、これをキーとしてソート処理をします。`keys` の要素数はリストの要素数と同じでなければいけません。

アトリビュート: `stable` をつけると、ステابلソートになります。大小比較が等しい要素が複数あったとき、それらの順序がソート前と同じである保障が得られます。

```
list#stddev() / iterator#stddev()
```

要素から標準偏差を算出し、結果を返します。

```
list#sum() / iterator#sum()
```

すべての要素を加算した結果を返します。

```
list#tail(n:number):map {block?} / iterator#tail(n:number) {block?}
```

リストまたはイテレータの最後から指定の数の要素だけ返すイテレータを生成します。

```
list#variance() / iterator#variance()
```

要素から分散値を算出し、結果を返します。

```
list#while (criteria) {block?}
```

リストまたはイテレータから、条件に合致している間の要素を抽出するイテレータを生成します。

`criteria` には関数またはイテレータを指定できます。

関数は、一つの引数を取り `boolean` 値を返すものを指定します。`while` 関数はリストまたはイテレータの要素をひとつずつ関数に渡し、その戻り値が `true` の間だけ要素を抽出します。`false` になったら処理を終了します。

`criteria` にイテレータを指定すると、`while` 関数は抽出対象のリストまたはイテレータと同時に `criteria` のイテレータを走査し、これが `true` 値の間だけ要素を抽出します。`false` になったら処理を終了します。

4.14. matrix クラス

4.14.1. インスタンスの生成

```
matrix(nrows:number, ncols:number, value?)
```

指定のサイズをもつ `matrix` 型インスタンスを生成します。引数 `nrows` に行数、`ncols` に桁数を指定します。引数 `value` に要素の値を指定します。`value` を省略すると、要素の値は `nil` になります。

```
@@{block}
```

`block` の内容を要素にした `matrix` インスタンスを生成します。ブロックの内容は値を以下のように並べたものになります。

スクリプト一般式	生成されるマトリクス
<code>@@{{a11, a12, a13, ...}, {a21, a22, a23, ...}, ...}</code>	$\begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} & \dots \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} & \dots \\ & & & \vdots \end{bmatrix}$

<code>@@{a11, a21, a31, ...}</code>	$\begin{bmatrix} a_{11} \\ a_{21} \\ \vdots \end{bmatrix}$
<code>@@{{a11, a12, a13, ...}}</code>	$\begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} & \dots \end{bmatrix}$

4.14.2. インデクスによる要素操作

数学表記では行と列のインデクスは 1 から始まりますが、`matrix` インスタンスにおけるインデクスの開始は 0 になります。

`matrix` インスタンスを `m` としたとき、`row` 行 `col` 列の要素は `m[row][col]` と表すことができます。

4.14.3. インスタンスメソッド

`matrix#col(col:number):map`

指定の列の要素をリストにして返します。

`matrix#colsize()`

マトリクスの列の数を返します。

`matrix#each():[transpose]`

マトリクスの要素をひとつずつとりだすイテレータを生成します。

デフォルトでは、先頭の行から順に左から右へ横方向に要素をとりだします。つまり、2 行 3 列のマトリクス `m` があつたとき、`each` メソッドが返す要素は `m11`, `m12`, `m13`, `m21`, `m22`, `m23` となります。

アトリビュート `:transpose` をつけると、左端の列から順に上から下へ縦方向に要素を取り出します。同じく 2 行 3 列のマトリクス `m` を考えると、`each` メソッドが返す要素は `m11`, `m21`, `m12`, `m22`, `m13`, `m23` となります。

`matrix#eachcol()`

列要素をリストにして返すイテレータを生成します。

`matrix#eachrow()`

行要素をリストにして返すイテレータを生成します。

`matrix.identity(n:number) {block?}`

指定の大きさの単位行列を生成します。

`matrix#invert()`

逆行列を計算し、結果を返します。

`matrix#issquare()`

正方行列のとき `true`、それ以外は `false` を返します。

`matrix#row(row:number):map`

指定の行の要素をリストにして返します。

```
matrix#rowsize()
```

マトリクスの行の数を返します。

```
matrix#set(value)
```

すべての要素を value で置き換えます。

```
matrix#setcol(col:number, value)
```

指定の列の要素を value で置き換えます。

```
matrix#setrow(row:number, value)
```

指定の行の要素を value で置き換えます。

```
matrix#submat(row:number, col:number, nrow:number, ncol:number):map
```

部分行列を返します。

```
matrix#tolist():[transpose]
```

マトリクスを二次元のリストにして返します。アトリビュート:transpose をつけると、転置した結果を二次元リストに変換します。

```
matrix#transpose()
```

転置行列を返します。

```
matrix#roundoff(threshold:number => 1e-10)
```

指定した値ですべての要素を丸めます。

4.15. palette クラス

4.15.1. インスタンスの生成

```
palette(type)
```

palette 型インスタンスを生成します。

引数 type に数値を指定すると、その数だけのエントリを持ったパレットを生成します。

引数 type に以下のいずれかのシンボルを指定し、既存のエントリを持ったパレットを生成することもできます。

``basic` 16 個の基本色エントリを持つパレット

``win256` Windows の 256 色パレット

``websafe` Web-safe な 216 色を持つパレット。インデクス 216 から 255 までは黒になります。

4.15.2. インスタンスメソッド

```
palette#each() {block?}
```

パレット中の色データを color 型で返すイテレータを生成します。

block をつけると、色データごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は |color:color,

Gura ライブラリリファレンス

`idx:number |` で、`color` に色データ、`idx` に 0 から始まるインデクス番号が入ります。

`palette#nearest(color:color):map:[index]`

パレットのエントリ中、引数で指定した色に最も近い色データを返します。アトリビュート `:index` をつけると、エントリ中のインデクス番号を返します。

`palette#shrink():reduce:[align]`

パレットの未使用エントリを削除して、エントリの格納に必要なサイズに変更します。アトリビュート `:align` を指定すると、エントリの格納に必要な最小の 2 のべき乗のサイズにします。

`palette#updateby(image_or_palette):reduce:[shrink,align]`

イメージまたは他のパレットでから取得した色データで、パレットのエントリを更新します。パレットのエントリサイズを超える数の色データがあった場合、超えた分は無視されます。アトリビュート `:shrink` をつけると、更新後に未使用エントリを削除して、エントリの格納に必要なサイズに変更します。このとき、アトリビュート `:align` も指定すると、エントリの格納に必要な最小の 2 のべき乗のサイズにします。

4.16. semaphore クラス

4.16.1. インスタンスの生成

`semaphore()`

`semaphore` 型インスタンスを生成します。

4.16.2. インスタンスメソッド

`semaphore#wait()`

セマフォが解放されるのを待ち、解放されたら所有権を取得します。`semaphore#release` と対にして使用します。

`semaphore#release()`

セマフォの所有権を解放します。`semaphore#wait` と対にして使用します。

`semaphore#session() {block}`

セマフォの所有権を取得して`block`を評価し、評価後に所有権を解放します。これは`semaphore#wait`と`semaphore#release`をブロックの入り口と出口で実行したのと同じです。

4.17. stream クラス

4.17.1. インスタンスの生成

`open(name:string, mode:string => 'r', encoding:string => 'utf-8'):map {block?}`

引数 `name` で指定したパス名のストリームをオープンします。引数 `mode` にはストリームのアクセス方法を以下の文字で指定します。

<code>r</code>	読み込みモード
<code>w</code>	書き込みモード

a	追加書き込みモード
---	-----------

引数 `mode` を省略し、パス名の先頭に ">" をつけると、書き込みモードでストリームをオープンします。
 引数 `encoding` は、ストリームを文字列として読み書きするときの文字エンコーディング名を指定します。
 この指定は、ストリームをバイナリデータとして扱うメソッドや関数には影響しません。

4.17.2. ストリーム操作を行うグローバル関数

```
copy(src:stream:r, dst:stream:w, bytesunit:number => 65536):map:void {block?}
```

入力用ストリーム `src` から出力用ストリーム `dst` にデータをコピーします。コピー処理はデフォルトで 65536 バイト単位で行われますが、引数 `bytesunit` でこれを変更することができます。

`block` を指定すると、コピー単位ごとにブロックパラメータを `|buff:binary|` という形式でブロックに渡して評価します。`buff` は入力用ストリームから入力したデータが入り、評価結果が `binary` 型の値であればそれを出力用ストリームに出力します。それ以外の型の場合はもとのデータを出力します。

```
template(src:stream:r, dst?:stream:w):map:[lasteol,noindent] {block?}
```

入力用ストリーム `src` からテンプレート文字列を読み込み、スクリプトの評価結果を埋め込んだ文字列を出力用ストリーム `dst` に出力します。引数 `dst` を省略すると、結果は `string` 型のデータで戻り値として返されます。

スクリプトはテキスト中に `"${" と "}"` に囲まれた領域に記述されます。

スクリプトの評価結果で、最後に現れた改行コードはとりのぞかれます。アトリビュート `:lasteol` をつけると、この改行コードをとりのぞかずに出力に含めます。

スクリプトの出力結果が複数行にわたるとき、スクリプトの開始を表す `"${"` の行の先頭にある空白文字が各行に追加されます。アトリビュート `:noindent` をつけると、このインデント機能が無効になります。

```
readlines(stream?:stream:r):[chop] {block?}
```

入力用ストリーム `stream` からテキストを読み込み、行ごとに分割した文字列を返すイテレータを生成します。デフォルトでは、改行記号まで含めた文字列を返しますが、アトリビュート `:chop` をつけると、改行記号を削除します。

引数 `stream` を省略すると、標準入力からテキストを読み込みます。

`block` をつけると、行ごとにその内容の評価します。ブロックパラメータの形式は `|line:string, idx:number|` で、`line` に行ごとの文字列、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

4.17.3. インスタンスメソッド

```
stream#close()
```

ストリームをクローズします。

ストリームインスタンスは消滅するときに自動的にクローズ処理を行いますが、`close` メソッドをそれを明示的にを行います。

```
stream#compare(stream:stream:r):map
```

ストリームの内容をバイトごとに比較します。要素の数もデータ内容も同じ場合 `true` を返します。それ以外

は `false` を返します。

`stream#dosmode(dos_flag:boolean):reduce`

改行コードの扱いを設定します。`dos_flag` を `true` にすると、改行コードを以下のように変換します。

- 入力時: `CR-LF` を `LF` に変換
- 出力時: `LF` を `CR-LF` に変換

`dos_flag` を `false` にすると変換処理を行いません。

`stream#peek(len?:number)`

ストリームからデータを `len` バイトだけ先読みします。シーク位置は変化しません。

`stream#print(values*):map:void`

引数に指定した値の内容を文字列にしてストリームに出力します。

`stream#printf(format:string, values*):map:void`

`printf` のフォーマットに基づいてストリームに出力します。

`stream#println(values*):map:void`

引数に指定した値の内容を文字列にしてストリームに出力します。最後に改行コードをストリームに出力します。

`stream#read(len?:number)`

ストリームからデータを `len` バイトだけ読み込みます。シーク位置も `len` だけ先に進みます。

`stream#readline():[chop]`

入力用ストリーム `stream` からテキストを一行分読み込み、文字列にして返します。デフォルトでは、改行記号まで含めた文字列を返しますが、アトリビュート `:chop` をつけると、改行記号を削除します。

`stream#readlines(nlines?:number):[chop] {block?}`

入力用ストリーム `stream` からテキストを読み込み、行ごとに分割した文字列を返すイテレータを生成します。デフォルトでは、改行記号まで含めた文字列を返しますが、アトリビュート `:chop` をつけると、改行記号を削除します。

`block` をつけると、行ごとにその内容を評価します。ブロックパラメータの形式は `|line:string, idx:number|` で、`line` に行ごとの文字列、`idx` に 0 から始まるインデックス番号が入ります。

`stream#readtext()`

ストリームからテキストをすべて読み取り、文字列にして返します。

`stream#seek(offset:number, origin?:symbol):reduce`

ストリームのシーク位置を先頭から `offset` の位置に動かします。`origin` に ``cur` を設定すると、現在のシーク位置に `offset` だけ足した位置に移動します。このとき、`offset` にはマイナスの値を設定することができます。

`stream#setencoding(encoding:string, dos_flag?:boolean)`

ストリームのエンコーディングを指定します。引数 `encoding` は、ストリームを文字列として読み書きするときの文字エンコーディング名です。`dos_flag` を `true` に設定すると、改行コードを以下のように変換します。

入力時: CR-LF を LF に変換

出力時: LF を CR-LF に変換

```
stream#tell()
```

ストリームのシーク位置を返します。

```
stream#write(buff:binary):reduce
```

ストリームにバイナリデータを書き込みます。

```
stream#copyfrom(src:stream:r, bytesunit:number => 65536):map:reduce {block?}
```

入力用ストリーム `src` からストリームインスタンスにデータをコピーします。コピー処理はデフォルトで 65536 バイト単位で行われますが、引数 `bytesunit` でこれを変更することができます。

`block` を指定すると、コピー単位ごとにブロックパラメータを `|buff:binary|` という形式でブロックに渡して評価します。`buff` は入力用ストリームから入力したデータが入り、評価結果が `binary` 型の値であればそれを出力用ストリームに出力します。それ以外の型の場合はもとのデータを出力します。

```
stream#copyto(dst:stream:w, bytesunit:number => 65536):map:reduce {block?}
```

ストリームインスタンスから出力用ストリーム `dst` にデータをコピーします。コピー処理はデフォルトで 65536 バイト単位で行われますが、引数 `bytesunit` でこれを変更することができます。

`block` を指定すると、コピー単位ごとにブロックパラメータを `|buff:binary|` という形式でブロックに渡して評価します。`buff` は入力用ストリームから入力したデータが入り、評価結果が `binary` 型の値であればそれを出力用ストリームに出力します。それ以外の型の場合はもとのデータを出力します。

4.17.4. インスタンスプロパティ

すべての `stream` インスタンスは以下のプロパティを持ちます。

プロパティ	型	R/W	内容
<code>stat</code>	<code>any</code>	R	ストリームの属性を返すインスタンスです。ストリームの種類によって内容が異なります。
<code>name</code>	<code>string</code>	R	ストリームの名前を返します
<code>identifier</code>	<code>string</code>	R	ストリームが属する集合の中で、このストリームを一意に識別できる文字列を返します。例えば、ファイルシステムのストリームならば絶対パス名に、 <code>zip</code> ファイル中ならばアーカイブに記録した名前になります。
<code>readable</code>	<code>boolean</code>	R	読みこみ可能なストリームならば <code>true</code> を返します
<code>writable</code>	<code>boolean</code>	R	書きこみ可能なストリームならば <code>true</code> を返します

4.18. string クラス

4.18.1. インスタンスの生成

- コード中に文字列リテラルを記述すると、`string` インスタンスの生成になります。

4.18.2. インスタンスメソッド

```
string#align(len:number, padding:string => ' '):map:[center,left,right]
```

文字列の長さを引数 `len` で指定した文字数でそろえます。もとの文字列が指定の長さに満たない場合は、引数 `padding` で指定した文字で埋めます。このとき、文字列の位置をアトリビュートで指示することができます。:`center` で中央、:`left` で左詰め、:`right` で右詰めになります。文字列の長さが `len` 以上である場合はもとの文字列を返します。

```
string#capitalize()
```

先頭の文字がアルファベットの小文字のとき、これらを大文字に変換した結果を返します。

```
string#chop(suffix:*string):[icase,eol]
```

何も引数やアトリビュートをつけずに実行すると、文字列中の最後の一文字を取り除いた結果を返します。

アトリビュート:`eol` をつけると、最後が改行記号のときのみ取り除きます。コードが `CR-LF` という連なりになっている場合は、これら 2 文字をとりのぞきます。

引数に文字列を指定すると、これらの文字列が最後にあらわれたときのみとりのぞきます。この文字列は複数指定することができます。アトリビュート:`icase` が指定されると、大文字と小文字を区別しません。また、アトリビュート:`eol` とともに実行した場合は、まず改行コードがあればそれをとりのぞき、その後指定文字列の除去を行います。

```
string#each():map:[utf8,utf32] {block?}
```

文字列中の文字をとりだし、文字コードを数値として返すイテレータを生成します。アトリビュート:`utf8` をつけると、`UTF-8` コード、:`utf32` をつけると、`UTF-32` コードの数値を返します。

```
string#eachline(nlines?:number):[chop] {block?}
```

文字列を一行ずつ切り出して返すイテレータを生成します。引数 `nlines` を指定すると、切り出す行数をその行数までに限定します。デフォルトでは、一行の文字列中に改行コードを含みますが、アトリビュート:`chop` をつけると改行コードをとりのぞきます。

```
string#encode(codec:codec)
```

文字列を指定のコーデックで変換した結果を `binary` 型として返します。

```
string#endswith(suffix:string, endpos?:number):map:[rest,icase]
```

文字列が `suffix` で終了している場合は `true`、それ以外は `false` を返します。アトリビュート:`icase` をつけると、大文字と小文字を区別しません。

アトリビュート:`rest` をつけると、文字列が `suffix` で終了している場合、それよりも前の文字列を返します。それ以外は `nil` を返します。

```
string#escapehtml()
```

`HTML` 書式で処理ができるようにした文字列を返します。

```
string#escapeuri()
```

`URI` 書式で処理ができるようにした文字列を返します。

Gura ライブラリリファレンス

`string#template(stream?:stream:w):[lasteol,noindent]`

文字列中に記述されたスクリプトを評価し、文字列に挿入します。スクリプトは文字列中で "\${" と "}" に挟んで記述します。

`string#find(sub:string, pos:number => 0):map:[rev,icase]`

文字列 `sub` が見つかった文字位置を返します。見つからない場合は `nil` を返します。引数 `pos` を指定すると、その位置から文字列を探します。アトリビュート `:rev` をつけると、後尾から文字列を探します。アトリビュート `:icase` をつけると、大文字と小文字の区別をつけません。

`string#format(values*):map`

文字列に記述された `printf` のフォーマットに従って引数 `values` の値を埋め込んだ文字列を返します。

`string#isempty()`

文字列が空のとき `true`、それ以外は `false` を返します。

`string#left(len?:number):map`

左から指定文字数だけ取り出した文字列を返します。

`string#len()`

文字列中の文字数 を返します。バイト数でないことに注意してください。

`string#lower()`

アルファベットを小文字に変換した結果を返します。

`string#mid(pos:number => 0, len?:number):map`

引数 `pos` の位置から長さ `len` 文字数だけ取り出した文字列を返します。

`string#print(stream?:stream:w):void`

文字列を引数 `stream` で指定したストリームに出力します。

`string#println(stream?:stream:w):void`

文字列を引数 `stream` で指定したストリームに出力し、最後に改行を出力します。

`string#reader() {block?}`

文字列内の文字コードを 1 バイトずつとりだすストリームを返します。文字コードは **UTF-8** です。

`string#replace(sub:string, replace:string, count?:number):map:[icase]`

引数 `sub` で指定した文字列を `replace` に置き換えます。引数 `count` を指定すると、置き換える回数を限定します。アトリビュート `:icase` をつけると大文字と小文字を区別しません。

`string#right(len?:number):map`

右から指定文字数だけ取り出した文字列を返します。

`string#split(sep?:string, count?:number):[icase] {block?}`

引数 `sep` を境界にして文字列を切り分けた結果を返すイテレータを生成します。引数 `count` を指定すると、

Gura ライブラリリファレンス

切り分ける数を限定します。アトリビュート: `icase` をつけると大文字と小文字を区別しません。

`string#startswith(prefix:string, pos:number => 0):map:[rest, icase]`

文字列が `prefix` で始まっている場合は `true`、それ以外は `false` を返します。アトリビュート: `icase` をつけると、大文字と小文字を区別しません。

アトリビュート: `rest` をつけると、文字列が `suffix` で始まっている場合、それよりも後の文字列を返します。それ以外は `nil` を返します。

`string#strip():[both, left, right]`

文字列の左右にある空白や改行要素をとりのぞいた結果を返します。

アトリビュート: `left` をつけると、左側のみの空白・改行要素をとりのぞきます。アトリビュート: `right` をつけると、右側のみのぞきます。アトリビュート: `both` は両側の空白・改行要素をとりのぞき、これがデフォルトの動作になります。

`string#unescapehtml()`

HTML 書式で処理ができるようにした文字列から通常の文字列にして返します。

`string#unescapeuri()`

URI 書式で処理ができるようにした文字列から通常の文字列にして返します。

`string#upper()`

アルファベットを大文字に変換した結果を返します。

`string#zentohan()`

文字列中の「全角文字」を、対応する ASCII 文字に変換した結果を返します。

5. sys モジュール

5.1. 概要

Gura 本体の動作モードを変えたり、実行状態を得たりするモジュールです。

5.2. モジュール関数

`sys.echo(flag:boolean)`

対話モードのとき、結果をエコーバックするか否かを設定します。flag に true を指定するとエコーバックが有効になります。

`sys.exit(status?:number)`

プログラムを終了します。status で終了コードを指定します。省略すると 0 になります。

5.3. モジュール変数

sys モジュール内には以下の変数があらかじめ設定されています。

変数	型	内容
ps1	string	対話モードで、インデントがかかっているときのプロンプト
ps2	string	対話モードで、インデントがかかっている間のプロンプト
stdin	stream	標準入力に使うストリーム
stdout	stream	標準出力に使うストリーム
stderr	stream	標準エラー出力に使うストリーム
path	list	モジュールのサーチパスを記述したリスト
version	string	バージョン番号
build	symbol	Gura をビルドした環境のシンボル値 `gcc` Linux 環境の gcc `msc` Windows 環境の Visual C++
platform	symbol	動作しているプラットフォームのシンボル値 `linux` Linux `windows` Windows
executable	string	実行ファイルのフルパス名
datadir	string	データディレクトリのフルパス名
libdir	string	ライブラリディレクトリのフルパス名
argv	list	引数リスト。argv[0] にはスクリプトの名前がフルパスで格納される

6. fs モジュール

6.1. 概要

ファイルシステムの操作をするモジュールです。

6.2. ストリームのオープン

`open` 関数でファイルシステム上のファイルをオープンできるようになります。

ストリームを受け取る引数に、ファイルシステム上のファイルパス名を指定できるようになります。

6.3. パスのサーチ

`path.dir`, `path.walk`, `path.glob` 関数で、ファイルシステム上のディレクトリパスをサーチできるようになります。

6.4. モジュール関数

`fs.chdir(pathname:string) {block?}`

カレントディレクトリを設定します。ブロックを指定した場合、カレントディレクトリを設定した後にブロックの内容を評価し、元のディレクトリに戻ります。

`fs.getcwd()`

カレントディレクトリを取得します。

`fs.mkdir(pathname:string):map:void:[tree]`

ディレクトリを作成します。

デフォルトでは、引数 `pathname` のパス名が複数の階層にまたがっていて、途中のディレクトリが存在しないとエラーになります。

アトリビュート `:tree` をつけると、途中のディレクトリが存在しないときそれらのディレクトリも作成します。

`fs.rmdir(pathname:string):map:void:[tree]`

ディレクトリを削除します。

デフォルトでは、削除対象のディレクトリ内にファイルや子ディレクトリが存在しているとエラーになります。

アトリビュート `:tree` をつけると、削除対象のディレクトリに含まれるファイルや子ディレクトリもすべて削除します。

`fs.remove(pathname:string):map:void`

ファイルを削除します。

`fs.rename(src:string, dst:string):map:void`

ファイルまたはディレクトリの名前を変更します。

`fs.chmod(mode:number, pathname:string):void`

ファイルの属性を数値で設定します。属性は数値のビット位置に対応しており、ビットを 1 に設定するとそ

Gura ライブラリリファレンス

の属性が有効になります。ビット位置と属性の関係を以下に示します。

b8 b7 b6	所有者のリード、ライト、実行属性
b5 b4 b3	グループのリード、ライト、実行属性
b2 b1 b0	その他のユーザのリード、ライト、実行属性

`fs.chmod(mode:string, pathname:string):void`

ファイルの属性を文字列で設定します。受け付ける文字列のフォーマットを正規表現であらわすと以下のようになります。

`[ugoa]*([-+=][rwx]+)+`

最初に、属性を設定する対象を指定し、続けて設定方法と属性を指定します。

設定する対象		設定方法		属性	
u	所有者	-	属性をとりのぞく	r	リード属性
g	グループ	+	属性を加える	w	ライト属性
o	その他のユーザ	=	属性を設定する	x	実行属性
a	全てのユーザ				

6.5. fs.stat クラス

6.5.1. インスタンスプロパティ

関数 `open` が返すストリームが `fs` モジュールのものであるとき、このストリームインスタンスは `stat` という名前のプロパティを持っており、これは `fs.stat` 型のインスタンスです。このインスタンスは以下のプロパティを持ちます。

プロパティ	データ型	R/W	内容
<code>pathname</code>	<code>string</code>	R	<code>dirname</code> と <code>filename</code> をあわせたフルパス名
<code>dirname</code>	<code>string</code>	R	ディレクトリ名
<code>filename</code>	<code>string</code>	R	ファイル名
<code>size</code>	<code>number</code>	R	ファイルサイズのバイト数
<code>uid</code>	<code>number</code>	R	ユーザ ID
<code>gid</code>	<code>number</code>	R	グループ ID
<code>atime</code>	<code>datetime</code>	R	アクセス時刻
<code>mtime</code>	<code>datetime</code>	R	修正時刻
<code>ctime</code>	<code>datetime</code>	R	作成時刻
<code>isdir</code>	<code>boolean</code>	R	ディレクトリするとき <code>true</code>
<code>ischr</code>	<code>boolean</code>	R	キャラクタデバイスのとき <code>true</code>
<code>isblk</code>	<code>boolean</code>	R	キャラクタデバイスのとき <code>true</code>
<code>isreg</code>	<code>boolean</code>	R	通常ファイルのとき <code>true</code>
<code>isfifo</code>	<code>boolean</code>	R	FIFO のとき <code>true</code>
<code>islnk</code>	<code>boolean</code>	R	リンクファイルのとき <code>true</code>

Gura ライブラリリファレンス

issock	boolean	R	ソケットのとき true
--------	---------	---	--------------

7. os モジュール

7.1. 概要

OS の操作をまとめたモジュールです。

7.2. モジュール変数

os モジュール内には以下の変数があらかじめ設定されています。

変数	型	内容
<code>stdin</code>	<code>stream</code>	標準入力。デフォルトで <code>sys.stdin</code> が割り当てられています。
<code>stdout</code>	<code>stream</code>	標準出力。デフォルトで <code>sys.stdout</code> が割り当てられています。
<code>stderr</code>	<code>stream</code>	標準エラー出力。デフォルトで <code>sys.stderr</code> が割り当てられています。

7.3. モジュール関数

`os.exec(pathname:string, args*:string):map:[fork]`

外部実行可能ファイルを実行します。引数 `pathname` に実行可能ファイルのファイル名、`args` に引数を指定します。

デフォルトでは、この関数は実行可能ファイルが終了するのを待ち、実行結果のエラーレベル（C 言語のプログラムならば `main` 関数の戻り値または `exit` 関数の引数値）を戻り値として返します。このとき、標準出力および標準エラー出力の内容をそれぞれ `os.stdout` と `os.stderr` に指定したストリームに対して出力します。

アトリビュート `:fork` をつけると、実行可能ファイルを起動した後、すぐに関数から処理が戻ります。この場合、戻り値は常に 0 です。

`os.fromnative(buff:binary):map`

OS 依存の文字列をスクリプトで処理できる文字列に変換します。

`os.getenv(name:string):map`

引数 `name` に対応する環境変数の値を文字列で返します。環境変数が設定されていない場合は空の文字列を返します。

`os.putenv(name:string, value:string):void`

引数 `name` に対応する環境変数の値を `value` に設定します。

`os.redirect(stdin:stream:nil:r, stdout:stream:nil:w, stderr?:stream:w) {block?}`

標準入力 `os.stdin`、標準出力 `os.stdout` および標準エラー出力 `os.stderr` を指定の `stream` インスタンスに設定します。引数 `stderr` は省略可能で、省略すると `stdout` に指定したのと同じ `stream` インスタンスに設定します。

`stdin` に `nil` を設定すると、標準入力に何も接続しません。`stdout` や `stderr` に `nil` を設定すると、これらの出力を抑止することができます。

Gura ライブラリリファレンス

ブロックを指定して実行すると、ストリームを設定してからブロックを評価し、評価後に設定をもとにもどします。

`os.redirect` の戻り値はブロックが指定されている場合はその評価値、指定されていなければ常に `nil` です。

`os.tonative(str:string):map`

スクリプトで処理できる文字列から OS 依存の文字列に変換します。

8. path モジュール

8.1. 概要

パス操作をまとめたモジュールです。

8.2. モジュール関数

`path.absname(name:string):map:[http]`

絶対パス名を返します。パス名は整形された形式で生成されます。整形の方法については `path.regulate` を参照ください。

`path.bottom(pathname:string):map`

パス名をパスセパレータで区切った時の最後の要素名を返します。

`path.cutbottom(pathname:string):map`

パス名をパスセパレータで区切った時の最後の要素名を取り除いた結果を返します。

`path.dir(pathname?:string, pattern*:string):map:flat:[stat, icase, file, dir] {block?}`

ディレクトリを表すパス名を指定し、含まれるファイルまたはディレクトリをサーチします。

引数 `pathname` はパス名です。引数 `pattern` には、ファイルまたはディレクトリのベース名に対するパターンを 0 個以上指定します。この引数を省略すると、すべてのファイルまたはディレクトリをサーチします。アトリビュート `:stat` をつけるとパス名ではなく詳細情報を含んだ `stat` 型オブジェクトを返します。`:icase` は、パターンマッチングの際に大文字と小文字の区別をなくすアトリビュートです。`:file` や `:dir` をつけると、サーチ対象をそれぞれファイルまたはディレクトリに限定できます。ブロック式をつけると、各サーチ結果ごとにブロックが繰り返し評価されます。このとき、ブロックには `|pathname:string, idx:number|` という形式で引数が渡されます。`pathname` はサーチ結果のパス名、`idx` はループのインデックス番号です。

`path.dirname(pathname:string):map`

パス名からディレクトリ名要素を抽出します。

`path.exists(pathname:string):map`

指定したパスが存在するとき `true` を返します。それ以外の場合は `false` を返します。

`path.filename(pathname:string):map`

パス名からファイル名要素を抽出します。

`path.glob(pattern:string):map:flat:[stat, icase, file, dir] {block?}`

パターンに適合するファイルやディレクトリをサーチします。

引数 `pattern` にパターンを指定します。このパターンはディレクトリ名を含むことができ、パス名の途中のディレクトリ名にもワイルドカードを使えます。

アトリビュート `:stat` をつけるとパス名ではなく詳細情報を含んだ `stat` 型オブジェクトを返します。`:icase` は、パターンマッチングの際に大文字と小文字の区別をなくすアトリビュートです。`:file`

や:dir をつけると、サーチ対象をそれぞれファイルまたはディレクトリに限定できます。

ブロック式をつけると、各サーチ結果ごとにブロックが繰り返し評価されます。このとき、ブロックには |pathname:string, idx:number| という形式で引数が渡されます。pathname はサーチ結果のパス名、idx はループのインデックス番号です。

```
path.join(paths+:string):map:[uri]
```

パス名をつなぎあわせた結果を返します。

つなぎあわせるときのパスセパレータは、現在動作している OS が Windows 系の場合はバックスラッシュ "¥"、それ以外の場合はスラッシュ "/" を使用します。ただし、アトリビュート:uri を指定するとパスセパレータとして常にスラッシュ "/" を使用します。

```
path.match(pattern:string, name:string):map:[icase]
```

文字列 name がファイル名マッチングパターン pattern に合致しているとき true を返します。それ以外は false を返します。デフォルトでは比較文字列の大文字と小文字を区別しますが、アトリビュート:icase をつけると区別しません。

マッチングパターンには以下のワイルドカードを使用することができます。

ワイルドカード	説明
*	任意の長さの文字列
?	任意の一文字
[...]	ブラケット内で指定した文字のいずれか
[!...]	ブラケット内で指定した文字以外のいずれか

```
path.regulate(pathname:string):map:[uri]
```

パス名を以下の条件に従って整形します。

- パスセパレータを統一します。現在動作している OS が Windows 系の場合はバッククォーテーション "¥"、それ以外はスラッシュ "/" を使用します。ただし、アトリビュート:uri を指定すると常にパスセパレータとしてスラッシュ "/" を使用します。
- 相対パス指定 "." をとりのぞきます。
- 相対パス指定 ".." をとりのぞき、ひとつ上のパス要素を削除します。

```
path.split(pathname:string):map:[bottom]
```

パス名をディレクトリ名とファイル名に分離し、リストにして返します。これは、path.dirname と path.filename の結果をあわせたものと同じです。

アトリビュート:bottom をつけると、パスセパレータで区切った時の前の要素と最後の要素をリストにして返します。これは、path.cutbottom と path.bottom の結果をあわせたものと同じです。

```
path.splitext(pathname:string):map
```

パス名のサフィックスを分離し、分離した前の部分とサフィックスをリストにして返します。

```
path.stat(pathname:string):map
```

指定したパスの属性を収めた stat インスタンスを生成して返します。stat インスタンスの内容はパス名

を解釈したモジュールによって異なります。

```
path.walk(pathname?:string, maxdepth?:number, pattern*:string)
      :map:flat:[stat,icase,file,dir] {block?}
```

パス名で指定したディレクトリを基点として含まれるファイルまたはディレクトリを再帰的にサーチします。

引数 `pathname` はパス名です。`maxdepth` には、サーチするディレクトリの深さを指定します。0 を指定すると基点のディレクトリのためのみのサーチとなり、これは `path.dir` の動作と同じになります。省略すると、深さの制限がなくなります。

引数 `pattern` には、ファイルまたはディレクトリのベース名に対するパターンを 0 個以上指定します。この引数を省略すると、すべてのファイルまたはディレクトリをサーチします。

アトリビュート `:stat` をつけるとパス名ではなく詳細情報を含んだ `stat` 型オブジェクトを返します。`:icase` は、パターンマッチングの際に大文字と小文字の区別をなくすアトリビュートです。`:file` や `:dir` をつけると、サーチ対象をそれぞれファイルまたはディレクトリに限定できます。

ブロック式をつけると、各サーチ結果ごとにブロックが繰り返し評価されます。このとき、ブロックには `|pathname:string, idx:number|` という形式で引数が渡されます。`pathname` はサーチ結果のパス名、`idx` はループのインデックス番号です。

9. math モジュール

9.1. 概要

数学演算処理をまとめたモジュールです。

9.2. モジュール関数

`math.abs(num) : map`

絶対値を計算します。

`math.acos(num) : map`

アークコサインを計算します。返される角度の単位はラジアンです。

`math.arg(num) : map`

`num` が複素数のとき、極座標における偏角を計算します。返される角度の単位はラジアンです。

`math.asin(num) : map`

アークサインを計算します。返される角度の単位はラジアンです。

`math.atan(num) : map`

アークタンジェントを計算します。返される角度の単位はラジアンです。

`math.atan2(num1, num2) : map`

`num1` / `num2` の値に対するアークタンジェントを計算します。返される角度の単位はラジアンです。
`num2` が 0 のときの値は、`num1` が正のとき $\pi/2$ 、負のとき $-\pi/2$ になります。

`math.bezier(nums[]+:number)`

`math.ceil(num) : map`

小数点以下一位を切り上げた数値を返します。

`math.conj(num) : map`

共役複素数を返します。

`math.cos(num) : map`

コサインを計算します。指定する角度の単位はラジアンです。

`math.cosh(num) : map`

ハイパボリックコサインを計算します。指定する角度の単位はラジアンです。

`math.covariance(a:iterator, b:iterator)`

二つのイテレータ要素間の共分散値を計算します。

`math.cross_product(a[], b[])`

`math.diff(expr:expr, var:symbol):map`

`expr` が数学の式からなるとき、`var` を変数とした微分演算処理を行い、結果を `expr` インスタンスで返します。

`math.dot_product(a[], b[])`

`math.exp(num):map`

底が **e** のべき乗値を計算します。

`math.fft(seq[])`

`t.b.d`

`math.floor(num):map`

小数点以下一位を切り捨てた数値を返します。

`math.imag(num):map`

`num` が複素数のとき、虚数成分を返します。それ以外の場合 0 を返します。

`math.integral()`

`t.b.d`

`math.least_square(x:iterator, y:iterator, dim:number => 1, var:symbol => `x)`

与えられた `x`, `y` 列に対し、最小二乗法による近似式を計算し、その演算式を持った `function` インスタンスを生成します。インスタンスの名前を `f` としたとき、呼び出し形式は以下のようになります。

`f(x:number):map`

引数 `dim` で近似式の次数を指定します。デフォルトでは一次式による近似を行います。

引数 `var` は、生成する `function` インスタンスの引数のシンボルを指定します。デフォルトは ``x` です。

`math.log(num):map`

底が **e** の **log** 値を計算します。

`math.log10(num):map`

底が **10** の **log** 値を計算します。

`math.norm(num):map`

ノルムを計算します。

`math.optimize(expr:expr):map`

`expr` が数学の式からなるとき、フォーマットを最適化した結果を `expr` インスタンスで返します。

`math.real(num):map`

`num` が複素数のとき、実数成分を返します。それ以外の場合 `num` そのものを返します。

`math.sin(num):map`

Gura ライブラリリファレンス

サインを計算します。指定する角度の単位はラジアンです。

```
math.sinh(num):map
```

ハイパボリックサインを計算します。指定する角度の単位はラジアンです。

```
math.sqrt(num):map
```

平方根を計算します。

```
math.tan(num):map
```

タンジェントを計算します。指定する角度の単位はラジアンです。

```
math.tanh(num):map
```

ハイパボリックタンジェントを計算します。指定する角度の単位はラジアンです。

10. time モジュール

10.1. 概要

時刻操作をまとめたモジュールです。

10.2. モジュール関数

`time.clock()`

1/100 秒ごとに数値が増えるシステムクロック値を返します。

`time.isleap(year:number):map`

指定した年がうるう年のとき `true` を返します。それ以外は `false` を返します。

`time.monthdays(year:number, month:number):map`

西暦と月を受け取り、その月の最終日を返します。

`time.parse(str:string):map`

`time.sleep(secs:number)`

指定した秒数だけスリープします。

`time.weekday(year:number, month:number, day:number):map`

指定した日の曜日をインデクス値で返します。日曜日が `0` で土曜日が `6` になります。

10.3. モジュール変数

変数	型	内容
<code>Sunday</code>	<code>number</code>	日曜日を表すインデクス番号 <code>0</code> が代入されています
<code>Monday</code>	<code>number</code>	月曜日を表すインデクス番号 <code>1</code> が代入されています
<code>Tuesday</code>	<code>number</code>	火曜日を表すインデクス番号 <code>2</code> が代入されています
<code>Wednesday</code>	<code>number</code>	水曜日を表すインデクス番号 <code>3</code> が代入されています
<code>Thursday</code>	<code>number</code>	木曜日を表すインデクス番号 <code>4</code> が代入されています
<code>Friday</code>	<code>number</code>	金曜日を表すインデクス番号 <code>5</code> が代入されています
<code>Saturday</code>	<code>number</code>	土曜日を表すインデクス番号 <code>6</code> が代入されています

10.4. datetime クラス

10.4.1. 概要

時刻を表すクラスです。

10.4.2. インスタンスの生成

`time.datetime(year:number => 0, month:number => 1, day:number => 1,`

Gura ライブラリリファレンス

```
hour:number => 0, min:number => 0, sec:number => 0,  
usec:number => 0, minsoff?:number):map
```

年月日および時刻を指定した `datetime` インスタンスを生成します。

```
time.now():[utc]
```

現在の年月日および時刻が入った `datetime` インスタンスを生成します。

```
time.time(hour:number => 0, minute:number => 0,  
sec:number => 0, usec:number => 0):map
```

時刻を設定した `datetime` インスタンスを生成します。年月日は 0 年 1 月 1 日に設定されます。

```
time.today():[utc]
```

今日の日付が入った `datetime` インスタンスを生成します。時刻は 00:00:00 が設定されます。

10.4.3. インスタンスメソッド

```
datetime#format(format => `w3c`)
```

指定のフォーマットで日時データを文字列に変換します。引数 `format` にはシンボルまたは文字列を指定します。引数 `format` にシンボルを指定した場合、以下のように変換します。

シンボル	説明
<code>`w3c`</code>	W3C の仕様で使われる日時フォーマットに変換します。 例: 2010-11-06T08:49:37Z
<code>`http`</code>	RFC で定義される HTTP の仕様で使われる日時フォーマットに変換します。 例: Sat, 06 Nov 2010 08:49:37 GMT
<code>`asctime`</code>	C 言語の <code>asctime</code> 関数のフォーマットで変換します。 例: Sat Nov 6 08:49:37 +0000 2010

引数 `format` に文字列を指定した場合、以下の指定子で日時データの要素を文字列変換します。指定子以外の文字はそのまま文字列に挿入されます。

指定子	説明
<code>%d</code>	日
<code>%H</code>	時間 (24 時間制)
<code>%I</code>	時間 (12 時間制)
<code>%m</code>	月
<code>%M</code>	分
<code>%S</code>	秒
<code>%w</code>	日曜日を 0 とした曜日のインデックス番号
<code>%y</code>	年の下 2 桁
<code>%Y</code>	年

```
datetime#settzoff(mins:number):reduce
```

UTC からの時差を分単位で指定します。

```
datetime#clrtzoff():reduce
```

UTC からの時差情報を取り除きます。

```
datetime#utc()
```

日時を UTC に変換した結果を返します。

10.4.4. インスタンスプロパティ

プロパティ	型	R/W	内容
year	number	R/W	西暦
month	number	R/W	1 から 12 までの数値で 1 月から 12 月を表します。
day	number	R/W	1 から 31 までの数値で 1 日から 31 日を表します。
hour	number	R/W	0 から 23 までの数値で 0 時から 23 時を表します。
min	number	R/W	0 から 59 までの数値で 0 分から 59 分を表します。
sec	number	R/W	0 から 59 までの数値で 0 秒から 59 秒を表します。
usec	number	R/W	0 から 999 までの数値で 0 ミリ秒から 59 ミリ秒を表します。
wday	number	R	0 から 6 までの数値で日曜日から土曜日を表します。
yday	number	R	1 から 366 までの数値で年の初めからの日数を表します。
unixtime	number	R	UTC の 1970 年 1 月 1 日 00:00:00 からの経過時間を秒で表わします

10.5. timedelta クラス

10.5.1. 概要

時刻間の差を表すクラスです。以下の状況で使用します。

- datetime インスタンス間の差を計算したときの結果
- datetime インスタンスの時刻を増減させるときの差分

10.5.2. インスタンスの生成

```
time.delta(days:number => 0, secs:number => 0, usecs:number => 0)
```

指定した値を持つ timedelta インスタンスを生成します。

10.5.3. インスタンスプロパティ

プロパティ	型	R/W	内容
days	number	R/W	0 からの数値で日数を表します。
secs	number	R/W	0 から 86399 (60×60×24 - 1) までの数値で秒を表します。
usecs	number	R/W	0 から 999999 までの数値でマイクロ秒を表します。

11. hash モジュール

11.1. 概要

hash ストリームオブジェクトを生成した後、hash#write() または hash#update() でデータ列を入力し、最後に hash#digest プロパティまたは hash#hexdigest プロパティを参照して結果を得ます。

11.2. モジュール関数

hash.crc32(stream?:stream:r) {block?}

CRC32 値を算出するストリームを作成して返します。引数 stream を指定すると、そのデータ内容を生成したストリームに書き込みます。

hash.md5(stream?:stream:r) {block?}

MD5 値を算出するストリームを作成して返します。引数 stream を指定すると、そのデータ内容を生成したストリームに書き込みます。

hash.sha1(stream?:stream:r) {block?}

SHA1 値を算出するストリームを作成して返します。引数 stream を指定すると、そのデータ内容を生成したストリームに書き込みます。

12. net.http モジュール

12.1. 概要

HTTP プロトコルのサーバとクライアント処理を提供するモジュールです。実装は RFC2616 で定められる仕様に基づきます。

以下の URL で公開されている zlib ライブラリを内部で使用しています。

`http://zlib.net/`

12.2. パス名の拡張

パス名が "http:" で始まっていると、net.http モジュールによってパスやストリームを処理します。

この拡張により、以下の操作が可能になります。

- open 関数で HTTP プロトコルを通じたファイルをオープンできるようになります。
- ストリームを受け取る引数に、HTTP のファイルパス名を指定できるようになります。

12.3. モジュール変数

変数	型	内容
proxies	net.http.proxy[]	net.http.addproxy で追加した net.http.proxy インスタンスのリストです

12.4. モジュール関数

```
net.http.addproxy(addr:string, port:number,
                  userid?:string, password?:string) {criteria?}
```

引数 addr と port に HTTP プロキシサーバのアドレスおよびポート番号を指定して HTTP プロキシ net.http.proxy インスタンスを生成し、モジュール変数 net.proxies に追加します。

プロキシサーバの接続で認証が必要な場合、userid と password を指定します。

ブロック criteria を省略すると、HTTP にクライアントとしてアクセスしたとき、常にこのメソッドで指定したプロキシをデフォルトとして使用します。

criteria をつけると、ブロックの評価結果が true のときのみこのプロキシを使います。criteria にはブロックパラメータが |addr:string| という形式で渡されます。addr はアクセス先のアドレスです。criteria は addr の内容をもとに、このプロキシを通すべきか判断します。

```
net.http.parsequery(query:string)
```

クエリー文字列をパースし、得られたキーと値を格納した dict インスタンスを返します。

```
net.http.splituri(uri:string)
```

URI を以下のようなフィールドに分けたリストを返します。

```
[scheme, authority, path, query, fragment]
```

該当するフィールドが URI 中に無い場合は空の文字列がその位置に入ります。

```
net.http.uri(scheme:string, authority:string,
             path:string, query?:string, fragment?:string)
```

フィールドをもとにして URI を構成します。必要のないフィールドには空の文字列を入れます。

12.5. net.http.server クラス

12.5.1. インスタンスの生成

```
net.http.server(addr?:string, port:number => 80) {block?}
```

指定したアドレスおよびポート番号で HTTP リクエストを待ちうける net.http.server インスタンスを生成します。

12.5.2. インスタンスプロパティ

プロパティ	データ型	R/W	説明
sessions	net.http.session[]	R	この server インスタンスが保持している session インスタンスのリスト

12.5.3. インスタンスメソッド

```
net.http.server#wait() {block?}
```

HTTP リクエストを待ち受けます。リクエストが来たらその内容を格納した net.http.request インスタンスを生成します。

ブロックを指定した場合、ブロックパラメータを `|req:net.http.request|` という形式で渡します。ブロックの評価が終わると、再び HTTP リクエストの待ち受けに戻ります。

12.5.4. サンプルプログラム

サーバプログラムの例を以下に示します。

```
import(net.http)
net.http.server(port => 80).wait {|req|
  html = '<html>hello world</html>'
  req.response('200', nil, html.encode('utf-8'),
    'Cache-Control'    => 'private'
    'Server'           => 'Test_HTTP_Server'
    'Connection'       => 'Keep-Alive'
    'Content-Type'     => 'text/html; charset=utf-8')
}
```

12.6. net.http.client クラス

12.6.1. インスタンスの生成

```
net.http.client(addr:string, port:number => 80,
                addrProxy?:string, portProxy?:number,
                useridProxy?:string, passwordProxy?:string) {block?}
```

指定したアドレスおよびポート番号に HTTP プロトコルで接続処理を行い、net.http.client インスタ

ンスを生成します。

引数 `addrProxy` および `portProxy` にプロキシサーバのアドレスおよびポート番号を指定すると、そのプロキシを通した **HTTP** アクセスを行います。認証が必要な場合は `useridProxy` と `passwordProxy` にユーザ名とパスワードを指定します。

プロキシの指定を省略すると、`net.http.addproxy` で登録したプロキシのうち条件に合致するものを探し、なければダイレクトで接続をします。

12.6.2. インスタンスメソッド

```
net.http.client#request(method:string, uri:string, body?:stream:r,
                        version:string => 'HTTP/1.1', header%) {block?}
```

接続したサーバに対してリクエストを発行し、受信したレスポンスをもとに `net.http.response` インスタンスを生成して返します。引数 `method` にリクエストのメソッド、`uri` にリクエスト **URI** を指定します。`uri` 文字列中にホスト名は含みません。

引数 `body` には、メッセージヘッダに続いて送信するメッセージボディのストリームを指定します。省略した場合、メッセージボディは送信しません。

名前付き引数として、`'field-name'=>'field-value'` の形式で引数リストに入れると、メッセージヘッダ中にそれらのフィールド定義を追加します。

`block` が定義されていると、生成された `net.http.response` インスタンスをブロックパラメータの引数にしてブロックを評価します。

以下にメソッドの使用例を示します。

```
net.http.client#cleanup()
```

レスポンスのメッセージボディをキャンセルするときに実行します。

12.6.3. リクエスト発行インスタンスメソッド

リクエストを発行するには `net.http.client#request` メソッドを使いますが、よく使われるリクエストについては、リクエストの名前を持ったインスタンスメソッドが用意されています。以下にメソッド名と `net.http.client#request` の `method` 引数に渡す文字列の一覧を示します。

メソッド名	method 引数に渡す文字列
<code>net.http.client#options</code>	<code>'options'</code>
<code>net.http.client#get</code>	<code>'get'</code>
<code>net.http.client#head</code>	<code>'head'</code>
<code>net.http.client#post</code>	<code>'post'</code>
<code>net.http.client#put</code>	<code>'put'</code>
<code>net.http.client#delete</code>	<code>'delete'</code>
<code>net.http.client#trace</code>	<code>'trace'</code>
<code>net.http.client#connect</code>	<code>'connect'</code>

12.6.4. サンプルプログラム

クライアントプログラムの例を以下に示します。

```
import (net.http)
net.http.client('hoge.com') {|c|
  resp = c.get('/',
    'Connection'    => 'keep-alive'
    'Keep-Alive'    => '300')
  resp.body.coppyto(sys.stdout)
}
```

12.7. net.http.stat クラス

12.7.1. 概要

open 関数などで net.http モジュールを通したストリームを取得すると、ストリームインスタンス中に stat という名前の net.http.stat インスタンスが作成されます。

12.7.2. メッセージヘッダのフィールド定義

net.http.stat クラスのインスタンスが stat という名前の変数に割り当てられているとき、インデクスアクセス stat['field-name'] でメッセージヘッダのフィールドに定義されている値を得ることができます。

フィールドが存在しない場合、この値は nil になります。存在する場合、そのフィールド名に対して最後に定義された値を文字列で返します。

12.7.3. インスタンスプロパティ

フィールド定義の中で時刻に関するものについては適切なデータ型に変換したプロパティが用意されています。

プロパティ	データ型	R/W	対応するフィールド	RFC2616
date	datetime	R	Date	14.18
expires	datetime	R	Expires	14.21
last_modified	datetime	R	Last-Modified	14.29

12.7.4. インスタンスメソッド

```
net.http.stat#field(name:string):map:[raise]
```

フィールド定義の値を文字列のリストで返します。指定のフィールド定義が無い場合空のリストを返します。

アトリビュート:raise をつけると、指定のフィールド定義が無い場合エラーになります。

12.8. net.http.request クラス

12.8.1. 概要

net.http.server インスタンスで wait メソッドを実行したときの戻り値として生成されます。サーバプログラムは、net.http.request のプロパティの値やメッセージボディの内容を確認し、response または

`respchunk` メソッドで適切なレスポンスを返します。

12.8.2. メッセージヘッダのフィールド定義

`net.http.request` クラスのインスタンスが `req` という名前の変数に割り当てられているとき、インデクスアクセス `req['field-name']` でメッセージヘッダのフィールドに定義されている値を得ることができます。

フィールドが存在しない場合、この値は `nil` になります。存在する場合、そのフィールド名に対して最後に定義された値を文字列で返します。

12.8.3. インスタンスプロパティ

`net.http.request` インスタンスが持っているプロパティは以下の通りです。

プロパティ	データ型	R/W	説明
<code>method</code>	<code>string</code>	R	リクエストメソッド
<code>uri</code>	<code>string</code>	R	リクエスト URI
<code>scheme</code>	<code>string</code>	R	リクエスト URI 中の <code>scheme</code> 要素
<code>authority</code>	<code>string</code>	R	リクエスト URI 中の <code>authority</code> 要素
<code>path</code>	<code>string</code>	R	リクエスト URI 中の <code>path</code> 要素
<code>query</code>	<code>string</code>	R	リクエスト URI 中の <code>query</code> 要素
<code>fragment</code>	<code>string</code>	R	リクエスト URI 中の <code>fragment</code> 要素
<code>version</code>	<code>string</code>	R	HTTP バージョン
<code>body</code>	<code>stream</code>	R	リクエストのメッセージボディを受信するストリーム
<code>session</code>	<code>net.http.session</code>	R	セッション情報

プロパティ `scheme`、`authority`、`path`、`query` および `fragment` は、プロパティ `uri` の文字列から抽出したものです。同じ結果はプロパティ `uri` の内容を `net.http.splituri` 関数で分割して得ることができます。

`session` プロパティは、`net.http.server` インスタンスが保持している `session` インスタンスへの参照です。セッションが保持されているかぎり、このプロパティは常に同じインスタンスを指します。

フィールド定義の中で時刻に関するものについては適切なデータ型に変換したプロパティが用意されています。

プロパティ	データ型	R/W	対応するフィールド	RFC2616
<code>date</code>	<code>datetime</code>	R	Date	14.18
<code>expires</code>	<code>datetime</code>	R	Expires	14.21
<code>last_modified</code>	<code>datetime</code>	R	Last-Modified	14.29

12.8.4. インスタンスメソッド

`net.http.request#field(name:string):map:[raise]`

フィールド定義の値を文字列のリストで返します。指定のフィールド定義が無い場合空のリストを返します。

アトリビュート:raise をつけると、指定のフィールド定義が無い場合エラーになります。

```
net.http.request#response (code:string, reason?:string, body?:stream:r,  
                           version:string => 'HTTP/1.1', header%):reduce
```

リクエストに対するレスポンスを送信します。このメソッドは、メッセージボディが必要ないか、レスポンスとして返すメッセージボディの長さがあらかじめ分かっているときに使用します。

引数 code に 3 桁の数字からなるステータスコード、reason にレスポンスの説明をするテキスト文字列を指定します。

引数 body には、メッセージヘッダに続いて送信するメッセージボディのストリームを指定します。省略した場合、メッセージボディは送信しません。

名前付き引数として、'*field-name*'=>'*field-value*' の形式で引数リストに入れると、メッセージヘッダ中にそれらのフィールド定義を追加します。

```
net.http.request#respchunk (code:string, reason?:string,  
                             version:string => 'HTTP/1.1', header%)
```

リクエストに対するレスポンスを送信し、出力用の stream インスタンスを生成します。このメソッドは、レスポンスとして返すメッセージボディの長さがあらかじめ分からない場合に使用します。

引数 code に 3 桁の数字からなるステータスコード、reason にレスポンスの説明をするテキスト文字列を指定します。

名前付き引数として、'*field-name*'=>'*field-value*' の形式で引数リストに入れると、メッセージヘッダ中にそれらのフィールド定義を追加します。

生成された stream インスタンスに対してメッセージボディのデータを書き込みます。stream#write メソッドを呼び出すごとに chunked-body を作成します。

```
net.http.request#ismethod (method:string)
```

リクエストのメソッド名を調べます。メソッドが引数 method と等しければ true、それ以外は false を返します。

12.9. net.http.session クラス

12.9.1. 概要

クライアントとのセッション情報を保持するクラスです。メソッド net.http.server#wait で生成される net.http.request インスタンスのプロパティとして存在します。

net.http.session インスタンスは、セッションが持続している間は常に同じ実体を参照します。そのため、セッションで保持すべき変数やオブジェクトを net.http.session インスタンスのプロパティにして利用することができます。

12.9.2. インスタンスプロパティ

セッションに関する以下のインスタンスプロパティを取得できます。

プロパティ	データ型	R/W	説明
-------	------	-----	----

server	net.http.server	R	このセッションを保持している server インスタンス
remote_ip	string	R	リクエスト元の IP アドレス
remote_host	string	R	リクエスト元のホスト名
remote_logname	string	R	t.b.d
local_ip	string	R	t.b.d
local_host	string	R	t.b.d
date	datetime	R	セッションを開始した日時

12.10. net.http.response クラス

12.10.1. 概要

net.http.client インスタンスで request メソッドを実行したときの戻り値として生成されます。クライアントプログラムは、net.http.response の情報を見てレスポンスの状態を確認し、メッセージボディを受信します。

12.10.2. メッセージヘッダのフィールド定義

net.http.response クラスのインスタンスが resp という名前の変数に割り当てられているとき、インデックスアクセス resp['field-name'] でメッセージヘッダのフィールドに定義されている値を得ることができます。

フィールドが存在しない場合、この値は nil になります。存在する場合、そのフィールド名に対して最後に定義された値を文字列で返します。

12.10.3. インスタンスプロパティ

レスポンスのステータスを以下のプロパティで取得できます。

プロパティ	データ型	R/W	説明
version	string	R	HTTP バージョン
code	string	R	3 桁の数字からなるステータスコード
reason	string	R	レスポンスの説明を表すテキスト文字列
body	stream	R	レスポンスのメッセージボディを受信するストリーム

フィールド定義の中で時刻に関するものについては適切なデータ型に変換したプロパティが用意されています。

プロパティ	データ型	R/W	対応するフィールド	RFC2616
date	datetime	R	Date	14.18
expires	datetime	R	Expires	14.21
last_modified	datetime	R	Last-Modified	14.29

12.10.4. インスタンスメソッド

```
net.http.response#field(name:string):map:[raise]
```

Gura ライブラリリファレンス

フィールド定義の値を文字列のリストで返します。指定のフィールド定義が無い場合空のリストを返します。
アトリビュート: `raise` をつけると、指定のフィールド定義が無い場合エラーになります。

13. bmp モジュール

13.1. 概要

イメージデータを Microsoft BMP イメージフォーマットで読み書きするモジュールです。

13.2. ストリーム処理

`image` 関数で指定したストリームが以下のいずれかの条件に合致すると、それを **BMP** イメージデータと認識して読み込み、`image` インスタンスを生成します。

- ストリームの識別子にサフィックス `.bmp` がついている（大小文字の区別はなし）
- ストリームの先頭が `"BM"` で始まっている

`image#write` メソッドで指定したストリームが以下の条件に合致すると、**BMP** イメージデータを出力します。

- ストリームの識別子にサフィックス `.bmp` がついている（大小文字の区別はなし）

13.3. `image` クラスの拡張

13.3.1. インスタンスメソッド

`image#bmpread(stream:stream:r):reduce`

指定のストリームから **BMP** フォーマットのデータを読み込んで `image` インスタンスにデータを展開します。

`image#bmpwrite(stream:stream:w):reduce`

`image` インスタンスのデータを **BMP** フォーマットにして指定のストリームに書き込みます。

14. gif モジュール

14.1. 概要

イメージデータを GIF (Graphics Interchange Format) イメージフォーマットで読み書きするモジュールです。

GIF89a の規格をサポートしており、アニメーション GIF を扱うことができます。実装は、以下の URL の記述に基づきます。

<http://www.w3.org/Graphics/GIF/spec-gif89a.txt>

14.2. ストリームの読み書き

image 関数で指定したストリームが以下のいずれかの条件に合致すると、それを GIF イメージデータと認識して読み込み、image インスタンスを生成します。

- ストリームの識別子にサフィックス `.gif` がついている (大小文字の区別はなし)
- ストリームの先頭が `"GIF87a"` もしくは `"GIF89a"` で始まっている

`image#write` メソッドで指定したストリームが以下の条件に合致すると、GIF イメージデータを出力します。

- ストリームの識別子にサフィックス `.gif` がついている (大小文字の区別はなし)

14.3. gif.content クラス

14.3.1. 概要

GIF ファイルは複数のイメージデータを格納できるフォーマットなので、単一の image インスタンスではファイル全体のデータ構造を処理することができません。gif.content クラスを使うと、複数のイメージデータを格納・参照したり、GIF フォーマットの詳細なパラメータの取得や設定ができるようになります。

14.3.2. GIF Data Stream の構造

gif.content クラスは以下の図に示す GIF Data Stream の構造を表します。オプションなブロックには色がつけられています。

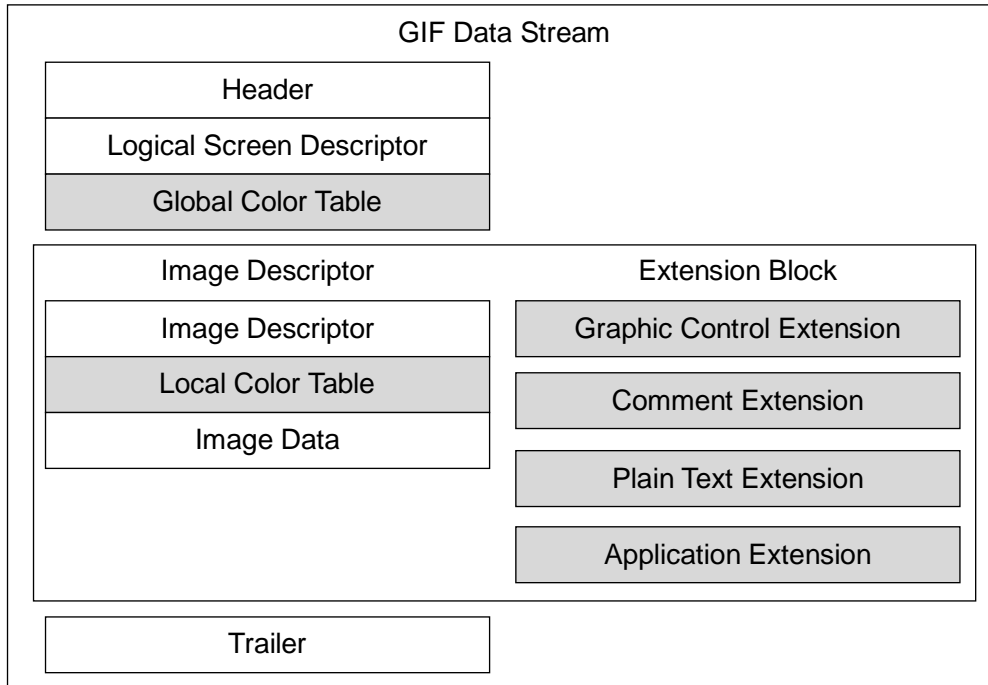


Image Descriptor と Extension Block は任意の数だけ GIF Data Stream に表れます。ただし、Graphic Control Extension は各 Image Descriptor の前に一つだけ置くことができます。

Image Data の内容は、image インスタンスのリストの形式で、gif.content 中に images という名前のプロパティとして格納されます。各 image インスタンスは Image Descriptor、Local Color Table および Graphic Control Extension の内容をプロパティとして持ちます。

Header、Logical Screen Descriptor、Comment Extension、Plain Text Extension および Application Extension の内容はそれぞれ gif.content 中に Header、LogicalScreenDescriptor、CommentExtension、PlainTextExtension および ApplicationExtension という名前のプロパティとして格納されます。

14.3.3. 制限事項

GIF の仕様では、Comment Extension、Plain Text Extension および Application Extension を複数格納することができますが、gif.content インスタンスで扱えるのはそれぞれ一個ずつです。複数存在する場合、最後に表れたデータを gif.content インスタンスに格納します。

14.3.4. インスタンスの生成

```
gif.content(stream?:stream:r, format:symbol => `rgba) {block?}
```

gif.content インスタンスを生成します。引数 stream を指定すると、そのストリームから GIF ファイル形式のデータを読み込みます。引数 format は、内部に保持する image インスタンスのフォーマットを指定します。

14.3.5. インスタンスメソッド

```
gif.content#addimage(image:image, delayTime:number => 0, leftPos:number => 0,
    topPos:number => 0, disposalMethod:symbol => `none):map:reduce
```

`gif.content` インスタンスにイメージデータを追加します。

```
gif.content#write(stream:stream:w):reduce
```

`gif.content` インスタンスの内容を GIF ファイル形式でストリームに書き込みます。

14.3.6. インスタンスプロパティ

`gif.content` インスタンスは、`images` というプロパティを持ち、これは `image` インスタンスのリストになっています。

また、`gif.content` インスタンスは GIF フォーマットの内部データを表す以下のプロパティを持っています。

プロパティ	データ型	R/W	定義
Header	<code>gif.Header</code>	R	required
LogicalScreenDescriptor	<code>gif.LogicalScreenDescriptor</code>	R	required
CommentExtension	<code>gif.CommentExtension</code>	R	optional
PlainTextExtension	<code>gif.PlainTextExtension</code>	R	optional
ApplicationExtension	<code>gif.ApplicationExtension</code>	R	optional

`CommentExtension`、`PlainTextExtension` および `ApplicationExtension` はオプションな情報で、GIF フォーマット中に存在しない場合、これらのプロパティは `nil` になります。

14.3.7. インスタンスプロパティの詳細

プロパティ `gif.content#Header` は `gif.Header` クラスのインスタンスで、GIF フォーマット中の **Header** の内容を表します。以下のプロパティを持っています。

プロパティ	データ型	R/W	内容
Signature	binary	R	GIF データの先頭を表す "GIF" というデータが入ります。
Version	binary	R	GIF のバージョンが入ります。"87a" か "89a" になります。

プロパティ `gif.content#LogicalScreenDescriptor` は `gif.LogicalScreenDescriptor` クラスのインスタンスで、GIF フォーマット中の **Logical Screen Descriptor** の内容を表します。以下のプロパティを持っています。

プロパティ	データ型	R/W	内容
LogicalScreenWidth	number	R	論理スクリーンにおけるイメージの幅をピクセル単位で表わします。
LogicalScreenHeight	number	R	論理スクリーンにおけるイメージの高さをピクセル単位で表わします。
GlobalColorTableFlag	boolean	R	Global Color Table を持っているとき <code>true</code> になります。

Gura ライブラリリファレンス

ColorResolution	number	R	元のイメージが持っている色のビット数から 1 を引いた数値が入ります。
SortFlag	boolean	R	Global Color Table のエントリが重要な色から順にソートされているとき true になります。
SizeOfGlobalColorTable	number	R	GlobalColorTableFlag が true のとき Global Color Table のバイト数を表します。
BackgroundColorIndex	number	R	Global Color Table 中の背景色のインデックス番号です。GlobalColorTableFlag が false のときは意味を持ちません。
BackgroundColor	color	R	Global Color Table 中の背景色を color インスタンスで取得します。 GlobalColorTableFlag が false のときは nil が返ります。
PixelAspectRatio	number	R	元の画像の縦横比を表します。 PixelAspectRatio が 0 のときは縦横比に関する情報はありませぬ。それ以外の場合、縦横比は以下の式で表わされます。 $(\text{PixelAspectRatio} + 15) / 64$

プロパティ gif.content#CommentExtension は gif.CommentExtension クラスのインスタンスで、GIF フォーマット中の Comment Extension の内容を表します。以下のプロパティを持っています。

プロパティ	データ型	R/W	内容
CommentData	binary	R	コメントデータ

プロパティ gif.content#PlainTextExtension は gif.PlainTextExtension クラスのインスタンスで、GIF フォーマット中の Plain Text Extension の内容を表します。以下のプロパティを持っています。

プロパティ	データ型	R/W	内容
TextGridLeftPosition	number	R	テキストグリッドの左端の位置をピクセルで表わします
TextGridTopPosition	number	R	テキストグリッドの上端の位置をピクセルで表わします
TextGridWidth	number	R	テキストグリッドの幅をピクセルで表わします
TextGridHeight	number	R	テキストグリッドの高さをピクセルで表わします
CharacterCellWidth	number	R	グリッド内の各セルの幅をピクセルで表わします
CharacterCellHeight	number	R	グリッド内の各セルの高さをピクセルで表わします

Gura ライブラリリファレンス

TextForegroundColorIndex	number	R	テキスト前景色の Global Color Table のインデクス番号です。
TextBackgroundColorIndex	number	R	テキスト背景色の Global Color Table のインデクス番号です。
PlainTextData	binary	R	テキストデータ

プロパティ `gif.content#ApplicationExtension` は `gif.ApplicationExtension` クラスのインスタンスで、GIF フォーマット中の **Application Extension** の内容を表します。以下のプロパティを持っています。

プロパティ	データ型	R/W	内容
ApplicationIdentifier	binary	R	アプリケーションデータの識別子
AuthenticationCode	binary	R	ApplicationIdentifier を認証する 3 バイトデータです
ApplicationData	binary	R	アプリケーションデータ

14.4. image クラスの拡張

14.4.1. インスタンスメソッド

`gif` モジュールをインポートすることで以下のメソッドが `image` クラスに追加されます。

`image#gifread(stream:stream):reduce`

指定のストリームから GIF フォーマットのデータを読み込んで `image` インスタンスにデータを展開します。複数のイメージがある場合は、最初のイメージを読み込みます。

`image#gifwrite(stream:stream):reduce`

`image` インスタンスのデータを GIF フォーマットにして指定のストリームに書き込みます。このメソッドでは、複数のイメージを含む GIF ファイルは作成できません。

14.4.2. インスタンスプロパティ

GIF ファイルから、関数 `image` を使って `image` インスタンスを生成したり、`image#gifread` を使って内容を更新すると、`image` インスタンス内に `gif` という名前のプロパティが追加されます。プロパティ `gif` は `gif.imgprop` クラスのインスタンスで、以下のプロパティを持っています。

プロパティ	データ型	R/W	内容
GraphicControl	<code>gif.GraphicControl</code>	R	Graphic Control Extension
ImageDescriptor	<code>gif.ImageDescriptor</code>	R	Image Descriptor

14.4.3. インスタンスプロパティの詳細

`image#gif.GraphicControl` は `gif.GraphicControl` クラスのインスタンスで、GIF ファイル中、Image Descriptor に先行して表れた Graphic Control Extension の内容を表します。以下のプロパティを持っています。

Gura ライブラリリファレンス

プロパティ	データ型	R/W	内容
DisposalMethod	symbol	R	イメージを表示した後の処理を表します `none` なにもしません `keep` イメージを破棄しません `background` 背景色に戻します `previous` 前のイメージに戻します
UserInputFlag	boolean	R	イメージ処理を続ける前にユーザ入力期待されているか否かを表します false ユーザ入力なし true ユーザ入力あり
TransparentColorFlag	boolean	R	背景色を有効にするか否かを表します false 背景色なし true 背景色あり
DelayTime	number	R	0 でない場合、次のイメージを処理するまでの 1/100 秒の遅延を表します。
TransparentColorIndex	number	R	背景色のインデクス値です。 TransparentColorFlag が true のとき有効です。

image#gif.ImageDescriptor は gif.ImageDescriptor クラスのインスタンスで、GIF フォーマット中の Image Descriptor の内容を表します。以下のプロパティを持っています。

プロパティ	データ型	R/W	内容
ImageLeftPosition	number	R	イメージの左端の位置をピクセルで表わします
ImageTopPosition	number	R	イメージの上端の位置をピクセルで表わします
ImageWidth	number	R	イメージの幅をピクセルで表わします
ImageHeight	number	R	イメージの高さをピクセルで表わします
LocalColorTableFlag	boolean	R	この値が true のときイメージは Local Color Table を持ちます
InterlaceFlag	boolean	R	true のとき、イメージがインターレースされていることを表します。
SortFlag	boolean	R	Local Color Table のエントリが重要な色から順にソートされているとき true になります。
SizeOfLocalColorTable	number	R	LocalColorTableFlag が true のとき Local Color Table のバイト数を表します。

14.4.4. パレットの扱い

GIF データの読み込み時、Image Descriptor が Local Color Table を持っている場合、その内容をエントリに持った palette インスタンスをイメージに登録します。Local Color Table が無い場合は Global Color Table の内容を入れた palette インスタンスに登録します。

Gura ライブラリリファレンス

GIF データを書き込む際、イメージが `palette` インスタンスを持っている場合はそのパレットを **Global Color Table** に書き込みます。`palette` インスタンスがない場合は **Web-safe** な色を持つパレットを作成して使用します。

15. jpeg モジュール

15.1. 概要

イメージデータを JPEG (Joint Photographic Experts Group) イメージフォーマットで読み書きするモジュールです。以下の URL で公開されている libjpeg ライブラリを内部で使用しています。

<http://www.ijg.org/>

15.2. ストリームの読み書き

image 関数で指定したストリームが以下のいずれかの条件に合致すると、それを JPEG イメージデータと認識して読み込み、image インスタンスを生成します。

- ストリームの識別子にサフィックス .jpeg、.jpg または .jpe がついている (大小文字の区別はなし)
- ストリームの先頭が 0xff, 0xd8 で始まっている (JPEG ストリームにおける Start of Image のシーケンス)

image#write メソッドで指定したストリームが以下の条件に合致すると、JPEG データを出力します。

- ストリームの識別子にサフィックス .jpeg、.jpg または .jpe がついている (大小文字の区別はなし)

15.3. image クラスの拡張

15.3.1. インスタンスメソッド

`image#jpegread(stream:stream:r):reduce`

指定のストリームから JPEG フォーマットのデータを読み込んで image インスタンスにデータを展開します。

`image#jpegwrite(stream:stream:w):reduce`

image インスタンスのデータを JPEG フォーマットにして指定のストリームに書き込みます。

16. msico モジュール

16.1. 概要

イメージデータを Microsoft アイコンファイルのフォーマットで読み書きするモジュールです。

アイコンファイルは通常サイズの異なる複数のイメージを格納していますが、msico モジュールの `content` クラスを使うと、格納されたイメージを取得したり、新たなイメージを追加したりすることができます。

モジュールの実装は以下の URL の記述に基づきます。

<http://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms997538.aspx>

16.2. ストリームの読み書き

`image` 関数で指定したストリームが以下のいずれかの条件に合致すると、それを ICO イメージデータと認識して読み込み、`image` インスタンスを生成します。

- ストリームの識別子にサフィックス `.ico` がついている（大小文字の区別はなし）

`image#write` メソッドで指定したストリームが以下の条件に合致すると、ICO イメージデータを出力します。

- ストリームの識別子にサフィックス `.ico` がついている（大小文字の区別はなし）

16.3. msico.content クラス

16.3.1. 概要

ICO ファイルは複数のイメージデータを格納できるフォーマットなので、単一の `image` インスタンスではファイル全体のデータ構造を処理することができません。`msico.content` クラスを使うと、複数のイメージデータを格納・参照することができるようになります。

16.3.2. インスタンスの生成

```
msico.content(stream?:stream:r, format:symbol => `rgba) {block?}
```

`msico` インスタンスを生成します。引数 `stream` を指定すると、そのストリームから ICO ファイル形式のデータを読み込みます。引数 `format` は、内部に保持する `image` インスタンスのフォーマットを指定します。

16.3.3. インスタンスメソッド

```
msico.content#addimage(image:image):map:reduce
```

`msico` インスタンスにイメージデータを追加します。

```
msico.content#write(stream:stream:w):reduce
```

`msico` インスタンスの内容を ICO ファイル形式でストリームに書き込みます。

16.4. image クラスの拡張

16.4.1. インスタンスメソッド

`image#msicoread(stream:stream:r):reduce`

ICO ファイル形式でストリームを読み込み、image インスタンスに展開します。複数のイメージが存在する場合は、最初のイメージを読み込みます。

`image#msicowrite(stream:stream:w):reduce`

image インスタンスの内容を ICO ファイル形式でストリームに書き込みます。このメソッドでは、複数のイメージを含む ICO ファイルは作成できません。

17. png モジュール

17.1. 概要

イメージデータを PNG (Portable Network Graphics) イメージフォーマットで読み書きするモジュールです。以下の URL で公開されている libpng ライブラリを内部で使用しています。

<http://www.libpng.org/pub/png/libpng.html>

17.2. ストリームの読み書き

image 関数で指定したストリームが以下のいずれかの条件に合致すると、それを PNG イメージデータと認識して読み込み、image インスタンスを生成します。

- ストリームの識別子にサフィックス `.png` がついている (大小文字の区別はなし)
- ストリームの先頭が `0x89, 0x50, 0x4e, 0x47, 0x0d, 0x0a, 0x1a, 0x0a` で始まっている

image#write メソッドで指定したストリームが以下の条件に合致すると、PNG イメージデータを出力します。

- ストリームの識別子にサフィックス `.png` がついている (大小文字の区別はなし)

17.3. image クラスの拡張

17.3.1. インスタンスメソッド

`image#pngread(stream:stream:r):reduce`

指定のストリームから PNG フォーマットのデータを読み込んで image インスタンスにデータを展開します。

`image#pngwrite(stream:stream:w):reduce`

image インスタンスのデータを PNG フォーマットにして指定のストリームに書き込みます。

18. ppm モジュール

18.1. 概要

イメージデータを PPM (Portable Pixmap) イメージフォーマットで読み書きするモジュールです。
モジュールの実装は以下の URL の記述に基づきます。

<http://local.wasp.uwa.edu.au/~pbourke/dataformats/ppm/>

18.2. ストリームの読み書き

`image` 関数で指定したストリームが以下のいずれかの条件に合致すると、それを PPM イメージデータと認識して読み込み、`image` インスタンスを生成します。

- ストリームの識別子にサフィックス `.ppm` または `.pbm` がついている (大小文字の区別はなし)
- ストリームの先頭が "P2"、"P3" または "P6" で始まっている

`image#write` メソッドで指定したストリームが以下の条件に合致すると、PPM イメージデータを出力します。

- ストリームの識別子にサフィックス `.ppm` または `.pbm` がついている (大小文字の区別はなし)

18.3. image クラスの拡張

18.3.1. インスタンスメソッド

`image#ppmread(stream:stream:r):reduce`

指定のストリームから PPM フォーマットのデータを読み込んで `image` インスタンスにデータを展開します。

`image#ppmwrite(stream:stream:w):reduce`

`image` インスタンスのデータを PPM フォーマットにして指定のストリームに書き込みます。

19. xpm モジュール

19.1. 概要

イメージデータを XPM (X Pixmap) イメージフォーマットで出力するモジュールです。

19.2. ストリームの書きこみ

`image#write` メソッドで指定したストリームが以下の条件に合致すると、**XPM** イメージデータを出力します。

- ストリームの識別子にサフィックス `.xpm` がついている（大小文字の区別はなし）

19.3. image クラスの拡張

19.3.1. インスタンスメソッド

`image#xpmwrite (stream:stream:w):reduce`

`image` インスタンスのデータを **XPM** フォーマットにして指定のストリームに書き込みます。

20. freetype モジュール

20.1. 概要

`image` インスタンスにテキストの描画を行います。以下の URL で公開されている **FreeType** ライブラリを内部で使用しています。

<http://www.freetype.org/>

20.2. 関数

`freetype.face(stream:stream, index:number => 0):map`

指定のストリームからフォントデータを読み込み、`index` 番目のフォントをもとに `freetype.face` インスタンスを生成します。

`freetype.sysfontpath(name?:string):map`

システムフォントが格納されているディレクトリパスを返します。引数 `name` を指定すると、ディレクトリとその名前を結合した結果を返します。

20.3. freetype.face クラス

20.3.1. インスタンスメソッド

`freetype.face#calcbbox(x:number, y:number, str:string):map`
`t.b.d`

`freetype.face#calcsize(str:string):map`
 文字列 `str` を描画したときのサイズを `[width, height]` という形式で返します。

`freetype.face#cleardeco():reduce`
 修飾要素をすべてとりのぞきます。

`freetype.face#drawtext(image:image, x:number, y:number, str:string):map:reduce`
`image` インスタンスの指定の位置に文字列を描画します。

`freetype.face#setalpha(alpha:number):reduce`
 描画時のアルファ要素を 0 から 255 までの数値で指定します。

`freetype.face#setcolor(color:color):reduce`
 描画時の色を指定します。

`freetype.face#setheight(height:number):reduce`
 フォントの高さをピクセル値で指定します。

`freetype.face#setrotate(degree:number):reduce`
 文字列の左下を原点にして文字列を、`degree` 度だけ回転します。`degree` が正の値のとき反時計まわり

に回転します。

```
freetype.face#setsize(width:number, height:number):reduce
```

フォントの幅と高さをピクセル値で指定します。

```
freetype.face#setslant(slant:number):reduce
```

フォントの傾きを設定します。0 のとき傾きなし、1 で文字を 45 度傾けます。

```
freetype.face#setstrength(strength:number):reduce
```

フォントの太さを設定します。0 でノーマル、1 で約二倍、2 で約三倍の太さになります。

20.3.2. インスタンスプロパティ

プロパティ	データ型	R/W	説明
num_faces	number	R	
face_index	number	R	
face_flag_scalable	boolean	R	FT_FACE_FLAG_SCALABLE
face_flag_fixed_width	boolean	R	FT_FACE_FLAG_FIXED_WIDTH
face_flag_sfnt	boolean	R	FT_FACE_FLAG_SFNT
face_flag_horizontal	boolean	R	FT_FACE_FLAG_HORIZONTAL
face_flag_vertical	boolean	R	FT_FACE_FLAG_VERTICAL
face_flag_kerning	boolean	R	FT_FACE_FLAG_KERNING
face_flag_fast_glyphs	boolean	R	FT_FACE_FLAG_FAST_GLYPHS
face_flag_multiple_masters	boolean	R	FT_FACE_FLAG_MULTIPLE_MASTERS
face_flag_glyph_names	boolean	R	FT_FACE_FLAG_GLYPH_NAMES
face_flag_external_stream	boolean	R	FT_FACE_FLAG_EXTERNAL_STREAM
face_flag_hinter	boolean	R	FT_FACE_FLAG_HINTER
face_flag_cid_keyed		R	(未使用)
face_flag_tricky		R	(未使用)
style_flag_italic	boolean	R	FT_STYLE_FLAG_ITALIC
style_flag_bold	boolean	R	FT_STYLE_FLAG_BOLD
family_name	string	R	
style_name	string	R	
bbox	list	R	
ascender	number	R	
descender	number	R	
height	number	R	

20.4. image クラスの拡張

20.4.1. インスタンスメソッド

`image#drawtext(face:freetype.face, x:number, y:number, str:string):map:reduce`

イメージの指定の位置に文字列を描画します。

21. sqlite3 モジュール

21.1. 概要

SQLite3 のデータベースにアクセスするためのモジュールです。以下の URL で公開されている SQLite3 クライアントライブラリを内部で使用しています。

<http://www.sqlite.org>

21.2. データオブジェクトの対応

SQLite3 のデータ型とスクリプトのデータ型は以下のように対応しています。

SQLite3	スクリプト
SQLITE_INTEGER	number
SQLITE_FLOAT	number
SQLITE_TEXT	string
SQLITE_BLOB	(未対応)
SQLITE_NULL	nil

21.3. sqlite3.db クラス

21.3.1. インスタンスの生成

```
sqlite3.db(filename:string) {block?}
```

データベースファイルを指定し、sqlite3.db インスタンスを生成します。

21.3.2. インスタンスメソッド

```
sqlite3.db#close()
```

データベースをクローズします。

```
sqlite3.db#exec(sql:string):map
```

SQL 文を実行します。

```
sqlite3.db#getcolnames(sql:string):map {block?}
```

SQL 文を実行した結果のカラム名をリストにして返します。

```
sqlite3.db#query(sql:string):map {block?}
```

SQL 文を実行した結果を返すイテレータを生成します。

```
sqlite3.db#transaction() {block}
```

SQLite3 コマンド "BEGIN TRANSACTION" を実行して block を評価し、その後 SQLite3 コマンド "END TRANSACTION" を実行します。

22. gzip モジュール

22.1. 概要

gzip 形式によるストリームデータの圧縮および展開を行います。以下の URL で公開されている zlib ライブラリを内部で使用しています。

<http://zlib.net/>

22.2. モジュール変数

圧縮レベルを表す以下の数値が変数に定義されています。

変数	型	内容
NO_COMPRESSION	number	圧縮なし (0)
BEST_SPEED	number	最も速度効率が高い (1)
BEST_COMPRESSION	number	最も高い圧縮率 (9)
DEFAULT_COMPRESSION	number	デフォルト (-1)

22.3. モジュール関数

```
gzip.reader(stream:stream:r) {block?}
```

ストリーム stream から gzip 形式で圧縮されたデータ列を読み込み、展開した結果を返すストリームを返します。

```
gzip.writer(stream:stream:w, level?:number) {block?}
```

ストリーム stream に gzip 形式で圧縮したデータ列を書きこむストリームを返します。

引数 level に 0 から 9 まで数値で圧縮レベルを指定します。0 が圧縮なし、9 が最も圧縮率が高い設定になります。

22.4. stream クラスの拡張

22.4.1. インスタンスメソッド

```
stream#gzipreader()
```

ストリーム stream から gzip 形式で圧縮されたデータ列を読み込み、展開した結果を返すストリームを返します。

```
stream#gzipwriter(level?:number)
```

ストリーム stream に gzip 形式で圧縮したデータ列を書きこむストリームを返します。

引数 level に 0 から 9 まで数値で圧縮レベルを指定します。0 が圧縮なし、9 が最も圧縮率が高い設定になります。

23. bzip2 モジュール

23.1. 概要

bzip2 形式によるストリームデータの圧縮および展開を行います。以下の URL で公開されている libbz2 ライブラリを内部で使用しています。

<http://www.bzip.org/>

23.2. モジュール関数

`bzip2.reader(stream:stream:r) {block?}`

ストリーム `stream` から **bzip2** 形式で圧縮されたデータ列を読み込み、展開した結果を返すストリームを返します。

`bzip2.writer(stream:stream:w) {block?}`

ストリーム `stream` に **bzip2** 形式で圧縮したデータ列を書きこむストリームを返します。

23.3. stream クラスの拡張

23.3.1. インスタンスメソッド

`stream#bzip2reader() {block?}`

ストリーム `stream` から **bzip2** 形式で圧縮されたデータ列を読み込み、展開した結果を返すストリームを返します。

`stream#bzip2writer() {block?}`

ストリーム `stream` に **bzip2** 形式で圧縮したデータ列を書きこむストリームを返します。

24. zip モジュール

24.1. 概要

ZIP アーカイブの操作をするモジュールです。以下の URL で公開されているライブラリを内部で使用しています。

http://zlib.net/	zlib
http://www.bzip.org/	libbz2

24.2. パス名の拡張

パス名の途中にサフィックス `.zip` がついた要素が存在し、それがファイルであれば、その要素以下のパスで指定されるディレクトリやファイルは `zip` モジュールによって処理されます。

この拡張により、以下の操作が可能になります。

- `open` 関数で ZIP アーカイブ中のファイルをオープンできるようになります。
- ストリームを受け取る引数に、ZIP アーカイブ中のファイルパス名を指定できるようになります。
- `path.dir`, `path.walk`, `path.glob` 関数で、ZIP アーカイブ中のディレクトリパスをサーチできるようになります。

24.3. zip.reader クラス

24.3.1. インスタンスの生成

```
zip.reader(stream:stream:r) {block?}
```

ストリームから ZIP アーカイブデータを読み込む `zip.reader` インスタンスを生成します。

24.3.2. インスタンスメソッド

```
zip.reader#entries() {block?}
```

ZIP アーカイブ中のファイルを読み取るストリームを返すイテレータを生成します。

24.4. zip.writer クラス

24.4.1. インスタンスの生成

```
zip.writer(stream:stream:w, compression?:symbol) {block?}
```

ストリームに ZIP アーカイブデータを書き込む `zip.writer` インスタンスを生成します。引数 `compression` には圧縮形式を以下のシンボルから指定します。

- ``store` 非圧縮
- ``deflate` gzip 形式による圧縮 (デフォルト)
- ``bzip2` bzip2 形式による圧縮

24.4.2. インスタンスメソッド

```
zip.writer#add(stream:stream:r, filename?:string,
               compression?:symbol):map:reduce
```

ストリームの内容をもったエントリをZIPアーカイブに追加します。引数 `filename` をつけるとその名前でエントリを作成します。省略した場合、ストリームの名前がエントリにつけられます。

`compression` にはこのエントリに対する圧縮形式を `zip.writer` 関数と同じシンボルで指定します。省略した場合、`zip.writer` で指定した `compression` を適用します。

```
zip.writer#close():reduce
```

Central Directory Record の追加やストリームのフラッシュなど、必要な後処理を行います。

24.5. zip.stat クラス

24.5.1. インスタンスプロパティ

メソッド `zip.reader#entries` で返すストリームには、`stat` という名前のプロパティがあり `zip.stat` 型のインスタンスです。このインスタンスは以下のプロパティを持ちます。

プロパティ	データ型	R/W	内容
<code>filename</code>	<code>string</code>	R	ファイル名
<code>comment</code>	<code>string</code>	R	コメント
<code>mtime</code>	<code>datetime</code>	R	最終更新日時
<code>crc32</code>	<code>number</code>	R	CRC32 チェックサム
<code>compression_method</code>	<code>number</code>	R	圧縮形式
<code>size</code>	<code>number</code>	R	圧縮前のサイズ
<code>compressed_size</code>	<code>number</code>	R	圧縮後のサイズ
<code>attributes</code>	<code>number</code>	R	アトリビュート

25. tar モジュール

25.1. 概要

TAR アーカイブの操作をするモジュールです。通常の TAR ファイルに加え、gzip で圧縮された TAR ファイル（サフィックス `.tgz` または `.tar.gz`）および bzip2 で圧縮された TAR ファイル（サフィックス `.tar.bz2`）も処理できます。

モジュールの実装は以下の URL の記述に基づきます。

http://www.gnu.org/software/tar/manual/html_node/Standard.html

以下の URL で公開されているライブラリを内部で使用しています。

<http://zlib.net/> zlib
<http://www.bzip.org/> libbz2

なお、tar モジュールは zlib や libbz2 ライブラリを内包しているので、gzip や bzip2 モジュールをインポートする必要はありません。

25.2. パス名の拡張

パス名の途中に以下のいずれかのサフィックスがついた要素名が存在し、それがファイルであれば、その要素以下のパスで指定されるディレクトリやファイルは tar モジュールによって処理されます。

`.tar` `.tar.gz` `.tgz` `.tar.bz2`

この拡張により、以下の操作が可能になります。

- `open` 関数で TAR アーカイブ中のファイルをオープンできるようになります。
- ストリームを受け取る引数に、TAR アーカイブ中のファイルパス名を指定できるようになります。
- `path.dir`, `path.walk`, `path.glob` 関数で、TAR アーカイブ中のディレクトリパスをサーチできるようになります。

25.3. モジュール変数

ファイルタイプを表す以下の値が変数に割り当てられています。tar.stat クラスのプロパティ `typeflag` で参照されます。

変数	型	内容
REGTYPE	number	regular file
AREGTYPE	number	regular file
LNKTYPE	number	link
SYMTYPE	number	(reserved)
CHRTYPE	number	character special
BLKTYPE	number	block special

DIRTYPE	number	directory
FIFOTYPE	number	FIFO special
CONTTYPE	number	(reserved)
XHDTYPE	number	Extended header referring to the next file in the archive
XGLTYPE	number	Global extended header

25.4. tar.reader クラス

25.4.1. インスタンスの生成

```
tar.reader(stream:stream:r, compression?:symbol) {block?}
```

ストリームから **TAR** アーカイブデータを読み込む `tar.reader` インスタンスを生成します。

引数 `compression` を省略すると、ストリームの名前がサフィックス `.tar.gz` または `.tgz` を持っているとき **gzip** 展開して読み込みます。また、ストリームの名前がサフィックス `.tar.bz2` を持っているとき **bzip2** 展開して読み込みます。

`compression` に以下の `symbol` を指定してストリームデータの展開方法を指定することができます。

- ``none`` 展開処理なし
- ``auto`` ストリームの名前のサフィックスによる自動認識 (デフォルト)
- ``gzip`` **gzip** 展開
- ``bzip2`` **bzip2** 展開

25.4.2. インスタンスメソッド

```
tar.reader#entries() {block?}
```

TAR アーカイブ中のファイルを読み取るストリームを返すイテレータを生成します。

25.5. tar.writer クラス

25.5.1. インスタンスの生成

```
tar.writer(stream:stream:w, compression?:symbol) {block?}
```

ストリームに **TAR** アーカイブデータを書き込む `tar.writer` インスタンスを生成します。

引数 `compression` を省略すると、ストリームの名前がサフィックス `.tar.gz` または `.tgz` を持っているとき **gzip** 圧縮して書き込みます。また、ストリームの名前がサフィックス `.tar.bz2` を持っているとき **bzip2** 圧縮して書き込みます。

`compression` に以下の `symbol` を指定してストリームデータの圧縮方法を指定することができます。

- ``none`` 圧縮処理なし
- ``auto`` ストリームの名前のサフィックスによる自動認識 (デフォルト)
- ``gzip`` **gzip** 圧縮
- ``bzip2`` **bzip2** 圧縮

25.5.2. インスタンスメソッド

```
tar.writer#add(stream:stream:r, filename?:string):map:reduce
```

ストリームの内容をもったエントリを **TAR** アーカイブに追加します。引数 `filename` をつけるとその名前でエントリを作成します。省略した場合、ストリームの名前がエントリにつけられます。

```
tar.writer#close():reduce
```

ターミネータブロックの追加やストリームのフラッシュなど、必要な後処理を行います。

25.6. tar.stat クラス

25.6.1. インスタンスプロパティ

メソッド `tar.reader#entries` で返すストリームには、`stat` という名前の `tar.stat` 型のプロパティがあります。このプロパティは以下のメンバを持ちます。

プロパティ	データ型	R/W	説明
<code>name</code>	<code>string</code>	R	ファイル名
<code>linkname</code>	<code>string</code>	R	リンク名
<code>uname</code>	<code>string</code>	R	ユーザ名
<code>gname</code>	<code>string</code>	R	グループ名
<code>mode</code>	<code>number</code>	R	アクセスモード
<code>uid</code>	<code>number</code>	R	ユーザ ID
<code>gid</code>	<code>number</code>	R	グループ ID
<code>size</code>	<code>number</code>	R	ファイルサイズ
<code>mtime</code>	<code>datetime</code>	R	更新日時
<code>atime</code>	<code>datetime</code>	R	アクセス日時
<code>ctime</code>	<code>datetime</code>	R	作成日時
<code>chksum</code>	<code>number</code>	R	ヘッダブロック内のチェックサム
<code>typeflag</code>	<code>number</code>	R	ファイルタイプ
<code>devmajor</code>	<code>number</code>	R	デバイスメジャー番号
<code>devminor</code>	<code>number</code>	R	デバイスマイナー番号

26. re モジュール

26.1. 概要

正規表現を処理するモジュールです。以下の URL で公開されている鬼車ライブラリを内部で使用しています。

<http://www.geocities.jp/kosako3/oniguruma/>

正規表現を用いて、以下の文字列操作をすることができます。

- パターンマッチング – `match`
- 連続パターンマッチング – `scan`
- 文字列分割 – `split`
- 置換 – `sub`

26.2. 正規表現パターン記述について

re モジュールでは、`re.pattern` インスタンスで正規表現パターンを扱います。

正規表現の文法は POSIX の拡張正規表現に従います。将来的に正規表現のエンジンを変更する可能性もあるので、鬼車ライブラリで独自拡張されたパターンの使用は推奨しません。

`re.pattern` を引数にとる関数またはメソッドに文字列を指定すると、型キャストにより自動的に `re.pattern` インスタンスを生成し、引数として渡します。以下の二つの記述は等価です。

```
re.match(r'¥w+', str)
re.match(re.pattern(r'¥w+'), str)
```

正規表現のパターン文字列中では、文字種を指定したり正規表現記号を無効化したりするためにバッククオート記号 "¥" を多用します。そのため、正規表現パターンを記述するには、上記のように "r" プレフィックスつきで文字列を作成し、バッククオートをスクリプトのパーサに通常文字として認識させるようにしておくとう便利です。

`re.pattern` インスタンスはパターン文字列をもとに正規表現のパーサをコンパイルして生成されます。このため、大量の文字列を扱うとき、`re.pattern` インスタンスの生成を伴う文字列からのキャストがパフォーマンスを低下させる原因になります。あらかじめ `re.pattern` インスタンスを生成しておき、これを引数として渡すことで、評価効率を上げることができます。

26.3. モジュール関数

`re.match(pattern:re.pattern, str:string, pos:number => 0, endpos?:number):map`
 正規表現 `pattern` に文字列 `str` がマッチしたとき `re.match` インスタンスを返します。マッチしない場合は `nil` を返します。

引数 `pos` と `endpos` でパターンをマッチさせる範囲を文字単位で指定することができます。`endpos` は範囲に含める文字の次の文字位置を指定します。これらを省略した場合、文字列全体が処理対象になります。


```
re.scan(pattern:re.pattern, str:string, pos:number => 0, endpos?:number):map {block?}
```

正規表現 `pattern` に文字列 `str` がマッチしたとき `re.match` インスタンスを返すイテレータを生成します。マッチすると、マッチした文字列の次の文字からパターンマッチングを行います。このようにして、パターンがマッチしなくなるまで `re.match` インスタンスを返します。

引数 `pos` と `endpos` でパターンをマッチさせる範囲を文字単位で指定することができます。`endpos` は範囲に含める文字の次の文字位置を指定します。これらを省略した場合、文字列全体が処理対象になります。

```
re.split(pattern:re.pattern, str:string, count?:number):map {block?}
```

正規表現 `pattern` であらわされるパターンで文字列 `str` を分割します。引数 `count` を指定すると、分割数をその数までに限定します。

```
re.sub(pattern:re.pattern, replace, str:string, count?:number):map
```

文字列 `str` 中、正規表現 `pattern` にマッチする部分を `replace` で置換します。引数 `count` を指定すると、置換する回数をその数までに限定します。

`replace` には文字列または関数を指定します。

`replace` に文字列を指定したとき、マッチ部分をその文字列で置き換えます。このとき、`replace` 文字列中に "`¥0`" という記述があったとき、この部分をマッチした全体の文字列で置き換えます。また、"`¥1`"、"`¥2`" ... という記述はそれぞれマッチパターンのグループ 1、グループ 2...の文字列で置き換えます。

`replace` に関数を渡したとき、関数を以下の形式で呼び出し、マッチ部分をこの関数の戻り値で置き換えます。

```
replace(strSub:string)
```

戻り値が文字列でない場合は、文字列に変換してから置き換えます。

26.4. re.match クラス

26.4.1. インスタンスの生成

`re.match` インスタンスは以下の関数またはメソッドで生成されます。

- モジュール関数 `re.match`
- `re.pattern` クラスのメソッド `re.pattern#match`
- `string` クラスに追加されるメソッド `string#match`

26.4.2. マッチパターンの取得

`m` が `re.match` のインスタンスであるとする、`m[0]` を参照するとマッチした全体の文字列が返ります。また、`m[1]` は 1 番目のグループの文字列、`m[2]` は 2 番目のグループ文字列と続きます。[] を用いたグループ文字列参照は、`re.match#group` メソッドを使った場合と等価です。

グループに名前がついているとき、インデクスに名前文字列を指定することができます。グループ名は、以下の例のようにグループの内部に "`?<`" と "`>`" で囲んで記述します。

```
m = re.pattern(r'(?<first>¥d+)¥.(?<second>¥d*)').match('3.14')
```

この例の場合、最初のグループは `m['first']`、二番目のグループは `m['second']` というように参照できます。

26.4.3. インスタンスメソッド

```
re.match#end(index):map
```

引数 `index` で指定したグループの終了位置を返します。

```
re.match#group(index):map
```

引数 `index` で指定したグループの文字列を返します。この処理は、`[]` を用いたグループ参照と同じです。

```
re.match#groups()
```

マッチしたグループの文字列をリストにして返します。

```
re.match#start(index):map
```

引数 `index` で指定したグループの開始位置を返します。

26.5. re.pattern クラス

26.5.1. インスタンスの生成

```
re.pattern(pattern:string):map:[icase,multiline]
```

正規表現を記述した文字列から `re.pattern` インスタンスを返します。

アトリビュート: `icase` をつけると、マッチングの際大文字と小文字の区別をつけません。

アトリビュート: `multiline` をつけると、改行コードが含まれている文字列を処理できるようになります。

26.5.2. インスタンスメソッド

```
re.pattern#match(str:string, pos:number => 0, endpos?:number):map
```

正規表現 `pattern` に文字列 `str` がマッチしたとき `re.match` インスタンスを返します。マッチしない場合は `nil` を返します。

引数 `pos` と `endpos` でパターンをマッチさせる範囲を文字単位で指定することができます。`endpos` は範囲に含める文字の次の文字位置を指定します。これらを省略した場合、文字列全体が処理対象になります。

```
re.pattern#scan(str:string, pos:number => 0, endpos?:number):map {block?}
```

正規表現 `pattern` に文字列 `str` がマッチしたとき `re.match` インスタンスを返すイテレータを生成します。マッチすると、マッチした文字列の次の文字からパターンマッチングを行います。このようにして、パターンがマッチしなくなるまで `re.match` インスタンスを返します。

引数 `pos` と `endpos` でパターンをマッチさせる範囲を文字単位で指定することができます。`endpos` は範囲に含める文字の次の文字位置を指定します。これらを省略した場合、文字列全体が処理対象になります。

```
re.pattern#split(str:string, count?:number):map {block?}
```

正規表現 `pattern` であらわされるパターンで文字列 `str` を分割します。引数 `count` を指定すると、分割数をその数までに限定します。

```
re.pattern#sub(replace, str:string, count?:number):map
```

文字列 `str` 中、正規表現 `pattern` にマッチする部分を `replace` で置換します。引数 `count` を指定すると、置換する回数をその数までに限定します。

`replace` には文字列または関数を指定します。詳細についてはモジュール関数 `re.sub` の説明を参照ください。

26.6. string クラスの拡張

26.6.1. インスタンスメソッド

`re` モジュールをインポートすると、`string` クラスに以下のメソッドが追加されます。

```
string#match(pattern:re.pattern, pos:number => 0, endpos?:number):map
```

正規表現 `pattern` に `string` インスタンスがマッチしたとき `re.match` インスタンスを返します。マッチしない場合は `nil` を返します。

引数 `pos` と `endpos` でパターンをマッチさせる範囲を文字単位で指定することができます。`endpos` は範囲に含める文字の次の文字位置を指定します。これらを省略した場合、文字列全体が処理対象になります。

```
string#scan(pattern:re.pattern, pos:number => 0, endpos?:number):map {block?}
```

正規表現 `pattern` に `string` インスタンスがマッチしたとき `re.match` インスタンスを返すイテレータを生成します。マッチすると、マッチした文字列の次の文字からパターンマッチングを行います。このようにして、パターンがマッチしなくなるまで `re.match` インスタンスを返します。

引数 `pos` と `endpos` でパターンをマッチさせる範囲を文字単位で指定することができます。`endpos` は範囲に含める文字の次の文字位置を指定します。これらを省略した場合、文字列全体が処理対象になります。

```
string#splitreg(pattern:re.pattern, count?:number):map {block?}
```

正規表現 `pattern` であらわされるパターンで `string` インスタンスを分割します。引数 `count` を指定すると、分割数をその数までに限定します。

`string#split` メソッドは `string` クラスに元から備わっているインスタンスメソッドで、通常の文字列パターンによる文字列区切りを行います。

```
string#sub(pattern:re.pattern, replace, count?:number):map
```

`string` インスタンス中、正規表現 `pattern` にマッチする部分を `replace` で置換します。引数 `count` を指定すると、置換する回数をその数までに限定します。

`replace` には文字列または関数を指定します。詳細についてはモジュール関数 `re.sub` の説明を参照ください。

27. CSV モジュール

27.1. 概要

CSV ファイルの読み書きを行います。実装は RFC4180 で記述される仕様に基づきます。

27.2. モジュール関数

`csv.parse(str:string):map`

CSV 形式のテキストを含んだ文字列を受け取り、カンマで区切られたフィールドの値を要素に持つリストを一行ずつ返すイテレータを生成します。

`csv.reader(stream:stream:r) {block?}`

ストリームから CSV 形式のテキストデータを読み込み、カンマで区切られたフィールドの値を要素に持つリストを一行ずつ返すイテレータを生成します。

`csv.writer(stream:stream:w, format?:string) {block?}`

ストリームに CSV 形式のテキストデータ出力する `csv.writer` インスタンスを生成します。

引数 `format` には数値データのフォーマット文字列を指定します。省略すると `'%g'` が使用されます。

27.3. csv.writer クラス

27.3.1. インスタンスプロパティ

プロパティ	データ型	R/W	説明
<code>format</code>	<code>string</code>	R/W	フォーマット文字列。書きかえることで数値データの出力フォーマットを途中で変えることができます。

27.3.2. インスタンスメソッド

`csv.writer#write(fields+) {block?}`

引数 `fields` に与えた値をカンマでつなげ、CSV 形式のテキストにして出力します。

27.4. stream クラスの拡張

27.4.1. インスタンスメソッド

`stream#csvreader() {block?}`

ストリームから CSV 形式のテキストデータを読み込み、カンマで区切られたフィールドの値を要素に持つリストを一行ずつ返すイテレータを生成します。

`stream#csvwriter(format?:string) {block?}`

ストリームに CSV 形式のテキストデータ出力する `csv.writer` インスタンスを生成します。

引数 `format` には数値データのフォーマット文字列を指定します。省略すると `'%g'` が使用されます。

28. xml モジュール

28.1. 概要

XML ファイルの読み書きを行います。以下の URL で公開されている Expat ライブラリを内部で使用しています。

<http://expat.sourceforge.net/>

28.2. モジュール関数

```
xml.read(stream:stream:r)
```

28.3. xml.parser クラス

28.3.1. インスタンスの生成

```
xml.parser() {block?}
```

28.3.2. オーバーライドメソッド

```
xml.parser#StartElement(element:xml.element)
```

```
xml.parser#EndElement(name:string)
```

```
xml.parser#CharacterData(text:string)
```

```
xml.parser#ProcessingInstruction(target:string, data:string)
```

```
xml.parser#Comment(data:string)
```

```
xml.parser#StartCdataSection()
```

```
xml.parser#EndCdataSection()
```

```
xml.parser#Default(text:string)
```

```
xml.parser#DefaultExpand(text:string)
```

```
xml.parser#ExternalEntityRef()
```

```
xml.parser#SkippedEntity(entityName:string, isParameterEntity:boolean)
```

```
xml.parser#StartNamespaceDecl(prefix:string, uri:string)
```

```
xml.parser#EndNamespaceDecl(prefix:string)
```

```
xml.parser#XmlDecl(version:string, encoding:string, standalone?:boolean)
```

```
xml.parser#StartDoctypeDecl(doctypeName:string, systemId:string,  
    publicId:string, hasInternalSubset:boolean)
```

```
xml.parser#EndDoctypeDecl()
```

```
xml.parser#ElementDecl(name:string, type:symbol)
```

```
xml.parser#AttlistDecl(elemName:string, attName:string, attType:string,  
    default:string, isRequired:boolean)
```

```
xml.parser#EntityDecl(entityName:string, isParameterEntity:boolean,  
    value:string, base:string, systemId:string,  
    publicId:string, notationName:string)
```

```
xml.parser#NotationDecl(notationName:string, base:string,  
    systemId:string, publicId:string)
```

```
xml.parser#NotStandalone()
```

28.3.3. インスタンスプロパティ

プロパティ	データ型	R/W	説明
children	xml.element[]	R/W	

28.3.4. インスタンスメソッド

```
xml.parser#parse(stream:stream)
```

28.4. xml.element クラス

28.4.1. インスタンスの生成

```
xml.element(name:string, attrs%) {block?}
```

28.5. stream クラスの拡張

28.5.1. インスタンスメソッド

`stream#xmlread()`

29. yaml モジュール

29.1. 概要

YAML ファイルの読み書きを行います。以下の URL で公開されている yaml ライブラリを内部で使用しています。

<http://www.yaml.org/>

29.2. データオブジェクトの対応

29.3. モジュール関数

`yaml.compose(obj)`

`obj` の内容を YAML フォーマットの文字列にします。

`yaml.parse(str:string)`

YAML フォーマットの文字列をパースし、Gura のオブジェクトを生成します。

`yaml.read(stream:stream:r)`

ストリームから YAML フォーマットの文字列を読み取り、Gura のオブジェクトを生成します。

`yaml.write(stream:stream:w, obj):reduce`

`obj` の内容を YAML フォーマットの文字列にしてストリームに出力します。

29.4. stream クラスの拡張

29.4.1. インスタンスメソッド

`stream#yamlread()`

ストリームから YAML フォーマットの文字列を読み取り、Gura のオブジェクトを生成します。

`stream#yamlwrite(obj):reduce`

`obj` の内容を YAML フォーマットの文字列にしてストリームに出力します。

30. uuid モジュール

30.1. 概要

UUID を生成します。

30.2. モジュール関数

`uuid.generate():[upper]`

UUID を生成し、文字列にして返します。アトリビュート:`upper` をつけると、16 進数の A から F までの文字を大文字にします。

31. mswin モジュール

31.1. 概要

Microsoft Windows で提供される機能を扱うモジュールです。Windows COM インターフェースへのアクセスや、レジストリ操作が可能になります。

31.2. mswin.ole クラス

31.2.1. インスタンスの生成

```
mswin.ole (progid:string) :map:[connect,no_const]
```

指定の ProgID に対応する COM サーバを生成し、その COM サーバへのインターフェースをインスタンスメソッドとして備えた mswin.ole インスタンスを返します。アトリビュート :connect を指定すると、すでに存在する COM サーバへの接続を行います。

デフォルトでは、TypeInfo 中に定数値があるとき、これらを mswin.ole インスタンス中にプロパティとしてとりこみますが、アトリビュート :no_const をつけるとこの処理を省きます。

31.3. mswin.regkey クラス

31.3.1. 概要

Windows のレジストリを扱うクラスです。

31.3.2. 定義済みインスタンス

モジュール mswin には、レジストリのルートキーを参照する regkey 型のインスタンスが以下のようにあらかじめ定義されています。

```
mswin.HKEY_CLASSES_ROOT
mswin.HKEY_CURRENT_CONFIG
mswin.HKEY_CURRENT_USER
mswin.HKEY_LOCAL_MACHINE
mswin.HKEY_USERS
mswin.HKEY_PERFORMANCE_DATA
mswin.HKEY_DYN_DATA
```

31.3.3. インスタンスメソッド

```
mswin.regkey#createkey (subkey:string,
                        option?:number, samDesired?:number) :map {block?}
```

サブキーを作成します。subkey にキーの名前を指定します。

option には以下のいずれかの値を指定します。

- mswin.REG_OPTION_NON_VOLATILE
- mswin.REG_OPTION_VOLATILE

- `mswin.REG_OPTION_BACKUP_RESTORE`

`samDesired` には以下のセキュリティアクセスマスク値を組み合わせた値を指定します。

- `mswin.KEY_CREATE_LINK`
- `mswin.KEY_CREATE_SUB_KEY`
- `mswin.KEY_ENUMERATE_SUB_KEYS`
- `mswin.KEY_EXECUTE`
- `mswin.KEY_NOTIFY`
- `mswin.KEY_QUERY_VALUE`
- `mswin.KEY_SET_VALUE`
- `mswin.KEY_ALL_ACCESS`
- `mswin.KEY_READ`
- `mswin.KEY_WRITE`

`mswin.regkey#deletekey(subkey:string):map:void`

指定のキー `subkey` を削除します。

`mswin.regkey#deletevalue(valueName:string):map:void`

指定の値 `valueName` を削除します。

`mswin.regkey#enumkey(samDesired?:number):[openkey] {block?}`

デフォルトの動作では、サブキー名の一覧を得るイテレータを生成します。このとき、`samDesired` の値は意味を持ちません。

アトリビュート: `openkey` をつけると、サブキーをオープンし、そのキーに対応する `mswin.regkey` インスタンスを得るイテレータになります。このとき、`samDesired` はオープンするキーに対するセキュリティアクセスマスク値になります。

`mswin.regkey#enumvalue()`

レジストリエントリの名前の一覧を得るイテレータを生成します。

`mswin.regkey#openkey(subkey:string, samDesired?:number):map {block?}`

サブキー `subkey` をオープンします。`samDesired` はオープンするキーに対するセキュリティアクセスマスク値です。

`mswin.regkey#queryvalue(valueName?:string):map`

レジストリエントリのデータを取得します。`valueName` にレジストリエントリの名前を指定して実行すると、データ内容が返ります。指定の名前のレジストリエントリが無い場合はエラーになります。

`mswin.regkey#setvalue(valueName:string, data:nomap):map`

レジストリエントリのデータを設定します。`valueName` はレジストリエントリの名前、`data` は設定するデータです。

31.4. COM について

31.4.1. COM サーバへの接続

COM は Microsoft が開発したアプリケーションインターフェースの仕様です。Microsoft Word や Excel、Internet Explorer が COM をサポートしており、これらのアプリケーションの動作をすべて外部からコントロールすることができます。このような COM を外部に提供しているアプリケーションや DLL を COM サーバと呼びます。

`mwin.ole` で `mwin.ole` インスタンスを生成すると、指定した COM サーバへの接続を確立し、COM サーバが提供するメソッドやプロパティを動的に作成します。

以下は Microsoft Excel を起動し、既存のファイルをオープンする例です。

```
import(mwin)
mwin.ole('Excel.Application') {|app|
  app.Visible = 1
  app.Workbooks.Open(path.absname('hoge.xls'))
}
```

以下は Microsoft Word を起動し、既存のファイルをオープンする例です。

```
import(mwin)
mwin.ole('Word.Application') {|app|
  app.Visible = 1
  app.Documents.Open(path.absname('hoge.doc'))
}
```

31.4.2. プロパティの取得

`mwin.ole` インスタンスでプロパティ名をメンバとして参照すると、OLE プロパティの取得を行います。このとき、値の型を以下のように変換します。（注: 2012/06 現在、リストには対応していません）

OLE 型	スクリプトの型	説明
VT_UI1	number	1 バイト符号なし整数
VT_I2	number	2 バイト符号付き整数
VT_I4	number	4 バイト符号付き整数
VT_R4	number	4 バイト浮動小数点数値
VT_R8	number	8 バイト浮動小数点数値
VT_BOOL	boolean	ブーリアン値。0 のとき false、それ以外を true にします。
VT_DATE	datetime	時刻。タイムゾーンとしてローカルタイムを設定します
VT_BSTR	string	文字列
VT_DISPATCH	mwin.ole	OLE ディスパッチャ
VT_DECIMAL		(未対応)
VT_ERROR		(未対応)
VT_CY		(未対応)
VT_UNKNOWN		(未対応)

VT_VARIANT		(未対応)
------------	--	-------

COM へのアクセスは、プロパティ名に対応する `DispID` を指定して、`DISPATCH_PROPERTYGET` を実行しています。

31.4.3. プロパティの設定

`mswin.ole` インスタンスでプロパティ名をメンバにしたものに対して代入をすると、OLE プロパティの設定を行います。このとき、値の型を以下のように変換します。

スクリプトの型	OLE 型	説明
number (整数値)	VT_I4	4 バイト符号付き整数
number (実数値)	VT_R8	8 バイト浮動小数点数値
string	VT_BSTR	文字列
boolean	VT_BOOL	ブーリアン値。true のとき -1、false のとき 0 を設定します
list	VT_ARRAY	リスト
mswin.ole	VT_DISPATCH	OLE ディスパッチャ
datetime	VT_DATE	時刻。タイムゾーンを無視し設定日時をそのまま反映させます

COM へのアクセスは、プロパティ名に対応する `DispID` を指定して、`DISPATCH_PROPERTYPUT` を実行しています。

31.4.4. メソッドの実行

`mswin.ole` インスタンスのメンバを引数リストつきで評価すると、引数リスト内の値を OLE タイプに変換してから OLE メソッドを実行します。実行した結果得られた値をスクリプトの型に変換し、評価値として返します。

COM へのアクセスは、メソッド名に対応する `DispID` を指定して (`DISPATCH_METHOD` | `DISPATCH_PROPERTYGET`) を実行しています。

31.4.5. イテレータの生成

イテレータを期待している文中に `mswin.ole` インスタンスを指定したとき、内包している OLE オブジェクトがイテレータに対応していれば、適切なイテレータを生成します。以下は、Excel ワークブック中の全てのワークシート名を表示する例です。

```
import(mswin)
mwin.ole('Excel.Application') {|app|
  app.Visible = 1
  wb = app.Workbooks.Open(path.absname('hoge.xlsx'))
  for (ws in wb.WorkSheets) {
    println(ws.Name)
  }
}
```

COM へのアクセスは、`DispID` に `DISPID_NEWENUM` を指定して `DISPATCH_METHOD` を実行しています。

32. lets_module モジュール

32.1. 概要

バイナリモジュールの C++ソースコードとビルド用スクリプトのひな型を作成します。

```
$ gura -i lets_module hoge
```

33. modbuild モジュール

33.1. 概要

バイナリモジュールをビルドするためのモジュールです。以下は `Module_hoge.cpp` から `hoge.gurd` をビルドするスクリプトの例です。

```
import(modbuild)
builder = modbuild.Builder()
builder.build('hoge', ['Module_hoge.cpp'])
```

33.2. modbuild.Builder クラス

33.3. インスタンスプロパティ

プロパティ	データ型	R/W	説明
cflags	string	R/W	コンパイラオプション
incDirs	list	R/W	インクルードファイルのディレクトリ
ldflags	list	R/W	リンカオプション
precompile	string	R/W	Precompile するソースファイル名
progressFlag	Boolean	R/W	true のとき、コンパイル中のファイル名を表示します
hint	string	R/W	ビルドに失敗したときに表示するヒント文字列

33.4. インスタンスメソッド

`modbuild.Builder#build(target:string, srcs[:string])`

バイナリモジュールをビルドします。

`target` にサフィックスを取り除いたモジュールファイル名を指定します。階層構造中のモジュールである場合、ディレクトリ名を含めたパス名を指定します。

`srcs` はコンパイルするソースファイルをリストで指定します。リスト中の最初のファイルをモジュールのメインファイルとして扱います。

34. gurcbuild モジュール

34.1. 概要

コンポジットファイルを作成するモジュールです。以下はコンポジットファイル **hoge.gurc** を作成するスクリプトの例です。

```
import (gurcbuild)
gurcbuild.build(['hoge.gura', 'image1.png', 'image2.png'])
```

34.2. モジュール関数

`gurcbuild.build(pathNames[:string], dirName?:string)`

コンポジットファイルに格納するファイルを `pathNames` に指定します。`pathNames` の最初のファイルはスクリプトファイルでなくてはなりません。最初のファイル名のサフィックスを、**.gurc** にリネームしたものが出力するコンポジットファイルの名前になります。

コンポジットファイルはカレントディレクトリに生成されます。出力ディレクトリを変えたいときは引数 `dirName` を設定します。